

青年共産同盟機関誌

# 武装

第4号

職場学園の遊撃的反乱と地区制圧戦  
とをもつて大衆反乱闘争へ！ . . . . . 1

階級闘争の現段階と反乱闘争の戦略  
的意義 . . . . . 6

シンポジウム

高校生反乱の直面している問題と今  
後の課題 . . . . . 24

工場突入闘争論 . . . . . 34

東大裁判闘争とわれわれの任務 . . . 49

## 職場学園の遊撃的反乱と

地区制圧戦をもつて

大衆反乱闘争へ！

全国の同志兄弟諸君！

昨年十一月の闘い以来四ヶ月間、日本階級闘争全体はきわめて困難な局面に立たされてきた。帝国主義国家権力の追撃的な安保実質化攻撃が先進的労働者の職場を中心に吹き荒れる中で、明確な反撃と意識的な闘争の再構築をめざした闘いは、一月における沖繩全軍労の先進的労働者の闘争と本土では二月における全通労働者の処分粉碎闘争などほとんど数えるほどしかなかった。

ほかならぬ、十一月闘争を「大勝利」と総括し、階級闘争が「内乱」や「内戦」として闘われなければならないと呼号した左翼諸派が、後退戦の自己確認や単なるデモへの

人集め戦術にみずからの展望を設定し、事実上、闘いを放棄してきたのである。そしてその結果、現在、左翼反乱戦線は重大な分極化と再編成の時代を迎えようとしている。

たしかに、六七年―六八年前半にいたる街頭・基地実力闘争の連続的展開は、半ば反乱的質をもちつつ、次の東大―日大を軸とする全国学園占拠闘争の爆発の導火線となつた。そしてまた、その限りにおいて、左翼諸派の行動もまた一定の積極的役割を果たしたことも事実であつただろう。

しかし、六八年の学園占拠―都市地区占拠という大衆反乱闘争―真の権力闘争の革命的萌芽への発展に際し、左翼諸派はついに内的に介入することができず、その反政府闘争路線の限界を暴露した。

そして、六九年四・二八から一一・一六闘争までの過程は、全体としてみれば、明きらかに大衆反乱としての闘いの質が、ふたたび反政府闘争の後退を強いられ、したがって、より意識的対応に打って出た敵権力によつて屈服を強制されてきた。

そこで現在、帝国主義国家権力の仮借なき攻撃と社共既成指導部の議会主義路線の明々白々な破産に直面し、いまだ広範に結集されている反乱戦線全体に、路線の選択がつきつけられているのである。

赤軍派の「ハイ・ジャック」闘争は、いわばそうした意味で、それなりの選択をつきつけたものであろう。彼らは、反政府闘争の限界を純粋軍事組織の行動によつて暴露しようとしているわけであるが、しかし、その「戦術」がソビエト大衆武装・二重権力の戦術として具体化したものと言えない以上、彼らもまた根本的限界をもつことは言うまでもない。

一方、中核派やE派は、反政府闘争の量的拡大とカンパニア結集にひたすら走ろうとしている。

われわれは、とうした反乱戦線内部における左翼諸派の路線に対し、日本階級闘争の現段階をはつきりと、工場占拠・二重権力・武装蜂起の革命闘争への過渡期に突入したものと捉え、ソビエト権力・大衆武装の戦術を具体化した戦術を真正面から提起し、それを貫徹しつつ、それら

諸派に対し反乱闘争の展開を迫り、左翼反乱戦線全体を再編成する党派闘争を任務としなければならぬだろう。

全国の同志兄弟諸君！

帝国主義国家権力の現時点における攻撃は、激化する世界危機の中で開始された権力闘争に対する反革命的弾圧攻撃としての性格をもっている。

日本帝国主義支配階級は、昨年の日米共同声明によつて、アメリカ帝国主義とともに公然とアジア革命戦争に対する反革命的介入を宣言した。これはまさしく、アジアの農民プロレタリアートの革命的権力闘争―解放革命戦争―がベトナムから、ラオス・タイ・カンボジアへと全インドシナ半島にわたつて拡大し、従来のアメリカのアジア戦略が破綻してきていることに対する反革命的再編を企図したものである。彼らは、朝鮮半島―台湾を中心とする東北アジアの反革命戦略配置につきつつ、アジア全域の権力闘争圧殺の体制を強化している。沖繩を筆頭とする国内基地の戦略基地への強化・自衛隊の出動範囲の拡張と装備の強化など、いわゆる安保実質化攻撃は急ピッチに進められてきているのだ。

だが、日本帝国主義国家権力の「安保実質化」攻撃は、単にこうしたアジア革命戦争への介入とそのための軍事強

化としてあるだけではない。そうした体制をより強固なものとするためにも、彼らは、今や本格的な労働者階級に対する攻勢に転じている。沖繩の「返還」をめぐる敵階級の攻撃は、何よりも沖繩全軍労の先進的労働者に対する圧殺の攻撃として存在しているし、昨年末から今年にかけての公労協内部の「反戦」系労働者に対する処分攻撃も同じである。しかも彼らはそれを突破口にして、全職場にわたる

労務管理・職制支配の強化等職場秩序の全面的強化をしかけてきている。また学園に対しても、「大学法」をテコに学園のブルジョア秩序の維持強化に全力を挙げている。そして、治安出動部隊としての機動隊をますます拡充し、独占企業の再統合と官僚機構の整備をすすめ、ブルジョア執行権力の独裁的強化をはかっているのだ。

こうした敵権力の攻撃の中で、左翼反乱戦線は重大な岐路に直面している。本年一月孤立しながらも、ストライキと実力基地包囲ピケ闘争をかちとつた沖繩全軍労の労働者も、決定的な第三波ストを組合官僚によつて圧殺され、今や本格的な反乱闘争―米軍・組合官僚・秩序派右翼暴力との死闘―への目的意識的追求が迫られている。

本土の労働者階級学生にとつても事態は同じである。「安保実質化」攻撃とは、とりもなおさず、職場学園における秩序の強化であり、支配と管理の徹底による締め上げにほかならない。学園も、かつてのような「クッション」は

ほとんどなく、直接権力の潜在的秩序下におかれている。

このような状況の中で左翼反乱戦線は、最初に確認したように、六八年切り拓いた権力闘争を再構築してゆく道を歩むのか、それとも、文字通りの「反政府闘争」に逆転してゆくのか、あるいはまた、「ハイ・ジャック」方式による、いわば単純軍事路線を選ぶのか、という岐路に立たされている。

われわれは、「ソビエト運動―大衆武装」「工場占拠―二重権力―武装蜂起」の戦略的任務を戦術として具体化し、それを大胆に実践しつつ、全ての反乱派大衆と右翼諸派に対して提起し行動を迫らなければならないであろう。

(三)

一方すでに、社会党と日本共産党は、四・二八―一日共闘を打ち出し、京都府知事選につづく東京都知事選へのカンパニアにしようとしている。そして彼らにとつて、六月はもはや国会休会中であり、これは文字通り七〇年安保「闘争」の打止め式となるわけだ。

他方、新左翼諸派もまた四・二八「大闘争」を設定してゐる。

だが、たとえば、革共同中核派によれば、この四・二八闘争の任務は、第一に「巨万の大衆デモ」を実現し、第二に「社共共闘の集会を獲得する大衆的結集」をかちとり、

第三に「党のための闘い」をその中でしつかり位置づけることだ、と主張されている。しかし、革命的権力闘争の戦略配置に規定されない「大衆結集」は単なる市民的統一戦線への転落でしかないし、そこにおける「党」は単なる反政府党でしかありえない。

そして、そうした市民的性格は、M.I.派諸君の「佐藤内閣打倒」大統一戦線という主張によつてさらに明確に補足されている。

われわれは、新左翼諸派の街頭行動における「大胆な」後退戦と、職場・学園における「大胆な」組合主義反対派運動・自治会主義運動への回帰を、こうした四月闘争の中にはつきりと把えることができる。

先にも確認したように、われわれは権力闘争の出発点としての反乱闘争を提起してきた。そして、われわれはすでに四月闘争の開始とともにそれを部分的に実践してきた。すなわち、二月の南部労学行動委員会による職場突入、職制・組合官僚粉砕闘争にひきつづき、立正大学では、入学式粉砕闘争をおして、大学理事会の番犬II右翼暴力を粉砕する闘いを展開した。また、明治学院大学では、日共II民青派都学連の学内介入策動を実力で粉砕しつつした。そして、これらの闘争を起点にして、学園のブルジョア秩序を破壊する遊撃的反乱戦を展開し、それを担う行動委員会の建設と革命的全共闘運動の再構築に着手しはじめたので

ある。

われわれは、わが青年共産同盟を核とする職場・学園・地区における行動委員会運動とその攻撃的遊撃戦の展開によつて、大衆的反乱闘争の展望をきりひろくであろう。

そして、一切のブルジョア秩序派を粉砕し解体させ、戦線内部における「中間的」潮流との闘争を貫徹し、左翼反乱戦線の革命的再編成を推しすすめるであろう。

(四)

権力闘争の端緒的開始と革命闘争への歴史的過渡期に突入した階級闘争の発展は、われわれに対して新たな組織問題を提出してきた。

そして、それは、一二月以降の具体的現実的な階級情勢に即して、さらに新しい問題をつきつけているであろう。

その第一点は、現時点における組合運動・自治会運動と訣別した大衆闘争組織の問題であり、第二点は、それとは相対的に独自の軍事的組織の問題である。

現時点における大衆的反乱組織に関しては、すでに何回となく提起したように、行動委員会運動を推進しなければならぬ。今日、学園の再占拠・バリケード闘争がただちに展開しえず、したがって、真の大衆武装組織としての全共闘の再建が困難であることは周知の事実であるが、しかし、このことは、だからといつて、全共闘を党派軍団にす

りかえたり、「戦闘的」自治会運動へとなし崩し的に置きかえたりすることを許すものではないのだ。

地区労学行動委員会の担う職場・学園の相互突入闘争と地区制圧戦の展開によつて、職場・学園反乱の促進と都市人民戦争・都市反乱闘争の展望をきりひろくこと、職場行動委員会の対職制・組合官僚闘争等をおした職場反乱・ソビエト運動の現在の任務、あるいは、その目的意識的建設の追求、そして、学園行動委員会による授業粉砕、対日共・右翼闘争をおした学園秩序粉砕闘争等による学園反乱・全共闘運動の現在の遂行、あるいは、その目的意識的再構築への追求―こうした行動委員会の攻撃的遊撃戦の展開から、われわれは大衆反乱闘争を組織していくであろう。以上のような行動委員会運動や遊撃戦の展開と密着しながらも、われわれは党独自の前衛的軍事組織と軍事行動の問題を考えなければならぬ。とくに、行動委員会運動の直面する官憲の壁に対し、それを突破し、大衆反乱と大衆武装をひき出すための軍事技術の開発と修得が要求されているであろう。この点に関しては、実践的課題と戦略綱領の一環としての「軍事綱領」の課題との両者から、われわれは獲得していく必要があるだろう。

☆職場・教室相互突入、官憲・職制・組合官僚・職場学園秩序粉砕の労学遊撃戦から工場・学園・地区の大衆反乱へ！

☆沖縄・労学地区反乱を突破口に都市人民戦争への展望をきりひろげ！

☆都市反乱・都市人民戦争から工場占拠・学園占拠の反乱ゼネストへ！

☆反戦・反安保・反帝国主義の実力反政府闘争から工場占拠・二重権力・武装蜂起・帝国主義打倒の革命的権力闘争へ！

☆革命的労働者学生は青年共産同盟に結集せよ！

# 階級闘争の現段階と反乱闘争の戦略的意義

## 一、階級闘争の現段階と反乱闘争の基本展望

### A、階級闘争の現段階

#### ——革命闘争への過渡的性格——

(一)

三月三十一日決行された赤軍派の「航空機武力奪取」闘争は、これまで左翼反乱戦線内部につきつけられてきた問題を、きわめて衝撃的な形で、あらためてつきつけなおすこととなった。

たしかに、六七年以降の安保闘争は日本階級闘争の渦中に革命的権力闘争の萌芽を登場させた。事実、階級闘争の攻防戦は、この労働者学生反乱戦線の力と、急傾斜を遂げるブルジョア執行権力独裁の力とを、基本的な拮抗関係

におきつつ展開されてきた。そして、このことは、日本における階級闘争もまた、世界階級闘争の一環として、きたるべき革命闘争—工場占拠・二重権力・武装蜂起・日帝打倒・プロレタリア独裁樹立・世界革命—への「歴史的過渡期」に突入したことを意味していると言えるだろう。

だが同時に階級闘争は、この反乱戦線内部に、権力闘争の「萌芽」を文字通り「権力による権力の打倒」の革命闘争に向けて発展させようとする力と、それを戦後日本の政治体制の枠内—反戦・反帝・反権力の反政府闘争の枠内—に押しとどめ、ひき戻そうとする力との矛盾関係をも内包してきたのである。

とくに、六八—六九年闘争において、中核派・M.I.派に

代表される「反政府闘争」の路線の下に反乱戦線の主力部隊が率られ、著しい敗北と後退を余儀なくされてきた。それは、「十一月闘争勝利」の大合唱にもかかわらず、七〇年の一月—三月の過程ではつきり事実としてつきつけられ、強力な敵権力の機動的介入と街頭制圧とによつて、自覚された「後退戦」へとすりかえられていった。

今回の「赤軍派」の行動は、彼らの死活をかけた武力襲撃によつて、敵権力の弱点をえぐり帝国主義ブルジョアジ—の権威を失墜させた。と同時に、それは、四月を前に、無力なカンパニアにすりかえた諸派に強力な一撃を加え、それによつて「赤軍派」のいわば純粹軍事路線を一つの潮流へと押し上げたと言えるだろう。

われわれは、ここで現在の反乱戦線内部における党派関係をはつきりと把握しなければならぬ。なぜならば、この党派関係は、革命闘争への過渡期にある階級闘争の現段階の「反映」にほかならないからであり、レーニンの言葉をかりれば、「最も純化された形態」だからである。

第一は先にもみたように、これまでの反乱戦線のいわば主流を占めてきた中核派・M.I.派に代表される「反政府闘争」路線である。彼らは、街頭デモの「突撃型」爆発と「カンパニア結集」との周期的くり返しとして、反政府・政策阻止の行動を設定し、その延長上に「軍団」の強化等の軍事問題を考えている。そして、昨年十一月以降「突撃型

」が困難になつたとみるや、純然たるカンパニアによる、つなぎと、現実に闘いのつきつけられている職場では組合主義左派路線に、学園では戦闘的自治会運動に、公然と後退しているのである。

第二は、こうした従来の反政府街頭行動の破綻から、とくに昨年四・二八以降、赤軍派に代表されるような、純粹軍事組織と軍事行動によつて、これらを打開しようとする路線であろう。彼らの当初の路線は、いわゆる「前段階蜂起」を中南米型のクーデター方式として展開し、そこから「高次の自然発生性」に基づく大衆的決起を展望するものであつたと言えるが、現時点では、ゲリラ行動の反復と国際根拠地の形成、それによる「前段階蜂起」という路線を設定していると考えられる。だが、こうした闘争は、たしかに、敵権力に対する一定の有効性とカンパニアに対する実践的批判とはなりえても、その根本的限界は、それによつて先進的大衆を卓なる応援者や見物人の地位にとどまらせてしまう点にある。

第三は、われわれが提起し実践してきているところの「ソビエト運動—大衆武装」の路線である。われわれにとつて、前衛党の軍事組織と軍事行動は、まさにその「ソビエト武装」—「工場占拠—二重権力—武装蜂起」にかかわつて、それを引き出し、導くものとして、はじめて意味をもつてであろう。これに対して、前の二つの路線は、革命への

明確な戦略的把握を欠き、階級闘争の歴史的現段階を把握できないために、ソビエト運動・全共闘運動を過少に評価するか、あるいはまた、みずからが陥れた六九年以降の階級闘争の一定の後退局面からソビエト武装への展望を「不確定な遠い将来のこと」とみなす誤りを犯している。それは、現実的には大衆反乱とその反乱組織からの召還として結果しているのである。われわれは、権力闘争の出発点として「都市反乱闘争」と「工場・学園占拠ソビエト運動・全共闘運動」の展開を展望しつつ、その現在の形態として、地区―戦場―学園における攻撃的遊撃戦と行動委員会運動を推し進め、「第三の道」を歩んできた。

現在の反乱戦線内部における党派関係は、基本的には、以上のような三つの傾向に分化しつつある。われわれに問われているのは、われわれの反乱闘争を文字通り貫徹し、「第三の道」ソビエト運動・ソビエト武装の道―を全戦線にわたって社会的に押し上げ、それによつて、反政府闘争を解体させ、反乱戦線内部における一切の組合主義路線や「中間派」を放逐し、「単純軍事」路線を革命的に克服することであろう。そして、そのためには、それを保障する、前衛的軍事組織の形成と、さらにそれを支える政治組織全体としての強化とを、もはや「ことば」の段階ではなく、「実践」の問題として可及的すみやかになし遂げなければならぬ。それをとらして、はじめてわれわれは、階

級闘争の歴史的「過渡期」を革命闘争へと止揚することが可能となるであろう。

以上述べてきた任務をより意識的に遂行するためには、階級闘争の現段階をさらに明確に認識しておく必要がある。そこで、われわれは、激化する世界危機の中で、今日、世界階級闘争全体が、歴史的過渡期に突入していることを確認することから出発しなければならぬ。

すなわち、一九六五年アメリカ帝国主義との本格的激突を開始したベトナム革命戦争は、今日、ラオス・カンボジア・タイを含めた全インドシナ半島におけるアジア革命戦争としての段階に突入している。

また、周知のように、帝国主義国内部にあつても、一九六八年のフランス五月革命を皮切りとし、イギリス・西独、イタリアの各国において、最近ではアメリカにおいても、広範な労働者階級の反乱的闘争がたい頭している。

これらの諸事実は、戦後の世界階級闘争が全体として一つの歴史的時代を画し、新たな段階へと移行を開始していることを告げているであろう。

第二次大戦によつて惹起された世界危機は、第一に、帝国主義諸国内部で帝国主義ブルジョアジーの手によつて終息され民主主義政治体制への移行が行なわれた。そして、

第二に、その帝国主義国の中で最も強大な軍事力と経済力とをもつアメリカ帝国主義によつて、対社会主義圏包囲の反共軍事国家群の形成、およびそれを基礎とする米ソ取りき体制へと砕けられていった。

ベトナムを筆頭とするアジア後進国の貧農・プロレタリアートの革命戦争は、その砕を武力をもつてぶち破り、全世界のプロレタリアート人民に帝国主義権力に対する闘いの選択をつきつけ、その可能性をさし示した。彼らの闘いの動力は、単なる民族運動としてあるのではなく、土地の武力解放と武装勢力による権力打倒の革命闘争として存在するものである。

また、帝国主義国内部のプロレタリアートの反乱的闘争への決起は、彼らがおかれてきた戦後民主主義体制への挑戦である。何故ならば、深化の差こそあれ、これら諸国のプロレタリアートの闘争の共通性は、民主主義体制の基礎をなす労働組合運動の砕をこえ、さらにはこれと抗争しつつ、資本と国家権力と対決する形をとっているからである。だからこそ、こうした反乱闘争の展開は、労働者階級の生産過程を基礎とする武装権力の構築―革命的権力闘争の出発点をなすものにはかならないからである。

以上確認してきたように世界階級闘争は権力闘争を内包し、世界プロレタリア独裁―世界共産主義樹立への新たな第一段階に突入した。だが、われわれは、それが未だ、後

進国の革命闘争と、帝国主義国のプロレタリア反乱とが結合されておらず、また、「社会主義圏」内部のプロレタリアの抵抗とも結びつけられていないことから明らかなように、歴史的過渡期であることを確認しなければならぬであろう。

そして、その最大の限界と制約は、帝国主義国内部の階級闘争の限界に起因しているとみななければならない。全インドシナ半島にわたつて、文字通りの革命戦争・権力闘争の永続的展開を貫徹しようとしているアジア後進諸国の貧農プロレタリアートの闘いに対し、帝国主義国内部の階級闘争は、権力闘争の萌芽としての反乱を開始したとはいえ、まだそれは部分であり不連続である。言いかえると、世界階級闘争の歴史的過渡期の革命的止揚は、まさにこの帝国主義国プロレタリアートの権力闘争の貫徹と革命戦争の遂行とによつて果たされるであろう。それは、彼ら労働者階級を主体とする総力戦であり、支配階級そのものを収奪し絶滅する労働者人民大衆の大衆的武装権力による革命闘争としてのみ保障される。そして、その世界革命はこうしたプロレタリアートのソビエト革命によつて統合される世界的なソビエト・コンミュニオン革命としてのみ存在するであろう。

こうしたプロレタリアートの世界的任務を再度確認した

上で、われわれは、次に、アジア革命戦争の渦中にあり、帝国主義支配の脆弱な環をなす日本帝国主義の内部における階級闘争の現段階を明きらかにしていきたい。

(三)

最初に確認したように、日本における階級闘争もまた、権力闘争の萌芽を登場させ、歴史的過渡期に突入している。戦後日本の階級闘争は、戦争直後の危機における革命闘争が、アメリカ帝国主義軍事権力と、唯一の指導部であった日本共産党の「占領下平和革命」路線とによつて敗北させられて以降、組合主義労働運動とそれを基礎にする民主主義政治闘争として梓づけられてきた。それは具体的には、四〇年代末と五〇年代初頭の「全面講和と安保反対」運動を出発点とする「反戦平和・反安保・護憲中立」の議会主義的・市民主義的運動として展開されたのであり、六〇年安保闘争は全体的にみればそうした五〇年代の反基地・反原水爆闘争などの集約点としてあつたのである。そして、この反政府闘争の公認の指導部こそ、社会党であり、その補完物としての日本共産党であつた。彼らは、このような戦後の政治構造と言いかえればブルジョア政治体制の内面において公認の反政府党として労働者階級を支配し、それに君臨してきたのであつた。

六〇年安保闘争の過程で闘いの急進的展開を推進し左派

突破口を切り開いたということと、それを明確に認識し、それを革命闘争に向けて領導しようとしたということとは、全く別の問題である。

実際、行動上反乱に起つた先進的部分の意識も、それからまた、そうした意識の即自的代弁者としての新左翼諸派の路線も、依然として反政府闘争の枠内にとどまつていた。したがつて、帝国主義国家権力が六八年十一月以降、ただちに巻返して転じ権力闘争に対する全面攻撃―学園バリケードの破壊と全都街頭ロックアウト体制―を開始した時、左翼諸派に率られた反乱戦線は、バリケードの消極的防衛と街頭突撃型デモの再現という玉碎カンパニアへと後退し、二重の敗北を喫していつたのである。

そして現在、新たな局面の下で、革命的権力闘争を再構築する道か、それとも、カンパニア路線と単純ゲリラ行動との動揺を歩むのか、そのことが反乱戦線全体に問われているであろう。

(四)

以上みてきたような階級闘争の現段階からも明きらかなように、帝国主義国家権力の攻撃の基本性格は、登場した権力闘争に対する破壊攻撃としてある。

日米共同声明一七〇年安保をめぐる、日本帝国主義が直面した問題は、アジアの貧農・プロレタリアートの権力闘

争を形成してきた新左翼の戦闘的全学連運動が六〇年の敗北とともに挫折し、六四と六五年の日韓・原潜闘争をおしてその再建が追求されていつた。そして、それは六六年の再建全学連と反戦青年委員会の登場に引きつがれ、「反戦・反帝・反権力」の反政府実力闘争として、一つの社会的勢力にまで形成されていつたのである。

だがそれは、けつして単なる戦闘的全学連運動の「再建」を結果したただけではなかつた。現実に、六七年砂川闘争を起点にする羽田―佐世保―王子―成田の諸闘争の展開は、部分的ではあれ、反乱的街頭行動Ⅱ地区占拠闘争の萌芽として闘いとられ、六八年の全国学園占拠闘争・都市反乱闘争を直接準備する闘いでもあつたのだ。

こうして登場した学園占拠バリケード闘争と新宿地区占拠闘争は、もはや「反乱闘争」―権力闘争の出発点としての反乱闘争―そのものであつた。それは、ブルジョア秩序をその社会的秩序から破壊し、さらに「法と秩序」を維持する国家権力の無力性を暴露したものであり、単なる「反政府闘争」や「政策阻止闘争」の枠を突破する全く新しい質の闘いであつた。そして、そうした大衆的学園武装占拠闘争に固有な闘争組織として全共闘を創出した。それはまさに、工場・職場・学園を基礎にする大衆武装―革命的闘争組織の萌芽として登場したのであつた。

だがしかし、そうした現実の行動が権力闘争としての突

争―解放革命戦争―といかに対決するか、という点であつた。アジアにおける戦後の政治軍事体制は、所謂、非同盟中立諸国とSEATO・韓国・台湾・比などアメリカとの軍事同盟諸国とによつて大別され、全体として米ソ取引体制の枠内におかれてきた。そして、ドル危機以降の経済的世界体制破壊の矛盾がまずアジア後進諸国に集中し、軒をみだりに経済危機と階級対立の激化とを引き起こした。その結果、非同盟中立諸国は、大巾に後退し、またとくにSEATO諸国内部の流動化が進み革命戦争が開始され、その進展は従来のSEATO体制の限界を暴露し、事実上、米ソ取引体制をもふみこえはじめたのである。日本帝国主義は、こうした事態に対して、アメリカ帝国主義との反革命同盟を強化し、台湾・韓国を公然と日米安保の適用範囲と宣言し、その体制をもつて東南アジア地区の革命戦争の拡大に対処しようとしている。彼らは、そのために、沖縄とともに国内基地の戦略基地化をはかり、自衛隊法の改定を試みてきている。

だが、帝国主義国家権力の攻撃は、単にこうしたアジア後進国の貧農・プロレタリアートの権力闘争に対して加えられようとしているだけではない。何よりもまた、日本階級闘争自身内部に権力闘争の萌芽を登場させたからである。したがつて、「安保実質化」と呼ばれる攻撃の内容は、単に、基地や自衛隊の強化としてあるだけでなく、開始さ

れた労働者。学生の権力闘争に対して向けられてきているであろう。六八年十一月からの敵権力の巻返し以降、昨六九年の過程をおして、工場・職場のみならず学園もまた、直接に潜在的な機動隊秩序下におかれてきた。そして、彼らは、六八年の「教訓」から、反乱の芽を、その芽の内に叩くという先制攻撃の必要を学びとり実践してきている。

そして現在、その攻撃の矛先は、六八年末から六九年秋にかけて、いわば一サイクル遅れて流動化を開始した先進的労働者階級に対し向けられている。われわれが再三確認してきたように、公労協「反戦派」労働者に対する処分攻撃を軸にした全職場に対する支配秩序の強化がはじまつてゐるのである。

こうして、今日、より強化された敵の執行権力独裁と、反撃への飛躍を問われている反乱戦線との「力関係」あるは「攻防戦」が階級闘争の基本軸となつてゐる。

帝国主義支配階級の「政策」の基盤は、この「力関係」と彼ら内部の意志調整―最近では対米関係や対中国政策をめぐるそれ―が主要な要素であつて、議会の地位はさらに低落しつつある。野党は量のうえで対抗できないばかりでなく、もはや、議院内闘争としても安保闘争にとりくめなゝ現状に陥つてゐる。彼らはたかだか「出版の自由」問題で民主主義への忠節を誓ひ、野党四派内闘争を重ねてゐるにすぎない。したがつて、ますます「議会の地位」は低下

し、敵権力の直接攻撃と権力闘争の反撃・再構築とが社会的政治的焦点となつてきているであろう。

#### B、反乱戦線の現状と反撃の基本方向

帝国主義国家権力の先制的攻撃によつてたしかに後退局面に立たされてはきたが、二年間の闘いの中で生みだされた先進的的反乱派大衆は、けつして六〇年安保の時のように社民や日共に集約されたり、あるいは単なる挫折感を喫しているわけでもない。

先にも確認したように、先進的労働者は、六八年秋から六九年秋にかけて登場し、多くはいわゆる「反戦派」として結集していつた。そして、職場内部に流動化を起こしながらも基本的には街頭に「出る」ことによつて、一応既成の組合運動から離れ独自行動を形成したのであつた。ところが昨年一月以降、本格的な処分・弾圧が全ての戦線にわたつて出され、他方、一二月総選挙における社会党の敗北以来、労働戦線の右翼的再編と組合統制の強化が一層進行し、先進的労働者は改めて職場生産点内部の階級闘争に対する対応を問われてきているであろう。

一方、昨年から今年にかけて、日本における反乱戦線の拠点としての役割を果たしてきた沖縄全軍労の先進的労働者

は、孤立させられたまま、組合幹部の破廉恥な「休戦協定」によつて屈服を強いられている。従来の「復帰運動」は、明確に分極化を開始し、かつての島ぐるみ運動の旗手であつた泉労協幹部や革新諸政党は、はつきりと、全軍労闘争の反乱の爆発―長期ストライキ・基地包囲実力ピケなどの闘いの発展―をおそれ、その庄殺を企ててきた。全軍労の先進的労働者にとつて、今や本格的な組合官僚と米軍と現地秩序派暴力と真向うから対決する本格的な反乱闘争が問われてきているだろう。

また、全共闘に結集した先進的學生大衆も、六九年における学園バリケードからの放逐と、街頭における権力からの行動の鎮圧と党派軍団からの疎外とによつて混迷を深め、事実上、全共闘は解体過程を歩んできたのである。そして、現時点では、もはや単純に部分占拠闘争から全学占拠バリケードへと直線的に展開することは、敵権力の一挙の介入によつて不可能となつてゐることも周知の事実であろう。したがつて、今日、学園内部からの自然成長的全共闘運動からの飛躍が、全共闘の革命的再建をめざす全ての先進的活動家にとつて問われている。しかもそれは、かつて六七年度の時代の単純な繰返しとして、街頭実力カンパニアの展開を媒介することによつても保障されないだろう。何故なら、そうした街頭実力カンパニア行動や大量逮捕によつて社会的にアピールする時代はすでに過去のものとなつた

のであり、ますます無力性を示してきているからである。

したがつて、全共闘の革命的再構築をめざす部分の行動は、相互の地区的結合・労働者の職場反乱との直接的結合、およびそれらの組織体としての労学反乱共闘の形成、それを基礎とする工場・学園の相互突入闘争等の攻撃的遊撃戦・地区制圧戦の展開、さらに、学園内部における大衆への切りこみとしての学園秩序のぶち壊しや右翼・日共との徹底した闘争の遂行―として設定されなければならないだろう。こうした具体的な反乱行動とその行動委員会組織の構築こそ、要求されている目的意識的全共闘運動への質的転換にほかならない。

こうした反乱戦線の現状に対して、新左翼諸派はいかに対応しようとしているのだろうか。

諸派の場合、すでにみてきた六八年の権力闘争の登場に際して全く内的に介在できず、したがつて、六九年、彼らの宣伝する「内乱」や「内戦」への突入とはうらはらに、実は、権力闘争の前進を反政府実力闘争、反安保抗議闘争の質へと客観的にはひき戻す役割を果たしたのであつた。

しかも彼らの多くは一月闘争を「勝利だ」と呼号することによつて、そうして生み出された後退の局面を無自覚なまま、あるいは故意にインペイしてきた。

そして、一二月の段階をとおして、ようやく彼らも階級闘争の現実の前にその自覚を強要されつつある。

それは、個別的なカンパニア運動や抵抗闘争による迂回戦術、あるいは待期戦術として具体化されてきている。

そして、このような公然たる後退戦への転換は、職場闘争においても、かつて単純に街頭に引き出した部分を再び組合主義運動の段階にひき戻す傾向を生み出し、せいぜい組合内反対派としての、対処分闘争・対職制闘争・あるいは反幹部闘争を唱えるにとどまらせている。かつての民同が今や右への急傾斜をとげている時、彼らの「反戦派」指導は、結果的には、まさにそうしたかつての民同組合左派の位置に反乱派大衆を納めてしまおうとする以外の何物でもない。

だが、彼らのこうした路線は、反乱派大衆の中に広汎に残っている自然成長的な戦後階級闘争の意識―反戦・反安保・反政府―の表現でもあり、その意味では歴史的過渡期にある階級闘争の所産でもある。だからこそ、この過渡性に決着をつけ、意識的に権力闘争を切り開かんとするわれわれにとつて、反乱派大衆のもつ自然発生の意識と闘争し、その中に埋没し、障害物と転落している諸派と闘争する任務は不可欠のものとなつてゐる。

(三)

すでに、これまでも総括を何回となく積重ねる中から、われわれの位置と任務の方向に関しては確認されてきた。

第一に、われわれ自身、一二月と一月にかけて、反乱闘争とカンパニア闘争との一般的関連を主張するだけに留まつていた点を総括し、二月・三月と大崎闘争を軸に、職場内部の対職制労働・対組合官僚粉砕闘争をかちとり、来たるべきソビエト運動の核としての行動委員会運動と地区労学反乱共闘を組織して反乱闘争の具体的推進をおしはかつてきた。

第二に、その闘いを主軸にしながら菱和闘争や城右、神奈川の高校生反乱を構築し、反乱戦線の拡大をはかつてきた。

第三に、われわれのこの間の一連の闘いは、諸派の後退路線と反乱戦線全体の混乱の中で必然的に突出した形となり、それ故一つには権力との関係がきわめて緊張し、それに対する独自の対応が要求されてきていること、また一つには、そうしたわれわれの行動委員会運動の推進によつて、まきこまれた組合主義のグループに打撃を与え、それとの党派闘争を激化させてきていること、が現時点での特徴である。

われわれは、まず、われわれの組織自体を明確に、そのような任務を貫徹するものへと再編成し、各地区の労学体

制をそれぞれの行動委員会を強化することを基礎にして固めていかなければならない。それ故われわれは、こうした

真の指導部としてのわれわれの形成と党派性の強固を確立に全力をあげようではないか。

## 二、反乱闘争とわれわれの任務

われわれは前章において、階級闘争の歴史的現段階を確認し、そこにおける基本任務を明らかにしてきたわけであるが、次に、その点をさらに理論的に解明し、具体化していくために、「反乱闘争」に関する歴史的、戦論的アプローチを試みたい。そして、それをふまえて、反乱闘争の現在の形態とその組織について提起することとしたい。

(文責 伴 透)

### (一) 反乱の戦略的意義

#### A、組合理闘争の歴史的意義と限界

##### ①先駆的反乱の挫折と労働組合の登場

資本主義体制は、直接的生産者の生産手段からの分離と人格的隷属関係からの解放を強行的に推進し、機械制大工業の下で近代的労働者階級に彼らを組織する過程で成立した。

労働者の商品化による生産過程での搾取をその存立の基礎とする資本主義体制は、産声をあげて以来労働者階級に

対する不断の抑圧を通して自らを維持、継続してきた。資本の抑圧に対する労働者階級の抵抗は、最初は、自然発生的で盲目的であり、組織的にも不定型な即自的反抗として現われた。

我々は、こうした資本主義体制に対する全面的であれ、部分的であれ、アンチ・テーゼとしての労働者階級の闘争を「反乱」の第一の規定として確認できるだろう。

それは、体制に対する「アンチ・テーゼ」であるが故に、自らを社会主義革命の主体として自覚していない労働者階級の闘争であるけれども、労働者階級は、そうした体制に対する「否定」の闘争の媒介としては自己を社会主義革命

の主体として「止揚」できないという意味で「反乱」は、革命戦路上不可欠な一環を占めるのである。

労働組合の登場は、原始的であるが故にまた、さまざまの爆発力を秘めた労働者階級の闘争が階級闘争の敗北の前に一段落を余儀なくされ、ブルジョアの合法性を与えられることにより体制内的に集約され、流動を続けた階級関係が転換局面を迎えたことの組織的表現であつた。

労働者階級は、一度確立された資本主義体制を歴史的な前提とした上でその転覆を問題にしなければならぬという局面に立たされたのである。

労働組合は、労働者階級を一人一票の私的平等の原則に基づいて組織するという意味で、そしてまた、ブルジョア法の内部に包摂されているという意味でも真の階級組織とはいひ難いが、労働力商品の販売者という独立した私的個人としての労働者を相互に結合させその闘争に階級としての組織的定在を与える積極的意義を有している。

ブルジョア体制の内部に位置づけられていたプロレタリアートの階級組織という労働組合の矛盾した性格は組合を前提とする限り、労働力商品の販売条件の改善をブルジョアジーの許容する範囲で追求するという圧力闘争の次元に労働者階級の闘いを押し止めようとする傾向を不断に帯びざるをえない。

従つて体制内的改良闘争の枠を乗り越えようとする労働

者階級の行為は、ブルジョアの合法性からの逸脱を意味し、権力との対決を不可避すると同時に、一人一票の私的平等原則に依拠する組合自身の分解と再編を不可避とする。つきにわれわれは、こうした点を戦後日本における階級闘争の歴史的過程に即して検討してみたい。

#### ②戦後危機における労働運動

戦後危機における労働運動の特徴は、日本帝国主義の天皇制国家権力ととりわけその軍隊の解体によつて一挙に爆発的發展を遂げたことであつた。それは自然成長的ではあれ、生産管理、ストライキの工場占拠闘争として展開され、さらにそれを基礎とする工場委員会、および、食糧管理委員会・人民協議会という結合の産別的・地域的統合という発展を遂げた。

だが、当初これを提起した日本共産党は、「占領下の平和革命」路線であつて、生産管理・工場占拠闘争を占領軍と政府に了解と承認を得ることを前提とした。こうして当時、唯一の指導部であつた日共は、二・一ストの中止から四九年の大敗北をもたらし、戦後革命は挫折させられた。

そして、生産管理を基礎とする工場委員会とその連合体は、次第に経営協議会化され、企業別組合に変質させられていつたのである。

#### ③総評・民同型組合運動（相対的安定期の労働運動）

いわゆる総評・民同型組合運動の成立とは、こうした戦後階級闘争の敗北の結果、階級闘争が体制内的改良（取り引き）闘争の枠内に固定化されたことを意味しており、その政治的表現が社会党を一方の極とする議会内取り引きであり、更にそれを補完する圧力闘争として街頭政治行動が設定されていた。

そうした取り引き的階級闘争の物質的基礎は、戦後危機のブルジョアの克服に伴う世界経済の拡大過程であつた。

#### ④相対的安定期の破綻

戦後世界経済の拡大を支えたドル・ポンド体制の根底的動揺は、取り引き的階級闘争の基盤そのものの喪失を意味し、組合主義的改良闘争の無力化を現出せしめた。

その結果、労働者階級は、総評・民同型闘争になんとかして固執しようとはがきつつするすると後退する部分と、合理化の容認等々全面的屈服をもつてブルジョアの再編に積極的に加担してそのおこぼれにあづかるうとする秩序派部分、或は、労働運動そのものに、無関心を装う部分の四極に分解を見せている。

従つて、一人一票の私的平等原則とブルジョアの合法性に依拠する組合主義的闘争をもつてしては階級闘争は、一歩の前進も期待できないという局面に、我々は、到達して

いるのである。

取り引き体制の破綻の結果、政治的圧力闘争も危機に直面し、既成指導部は、おしなべて経済主義的傾向に陥つていく。

けれども、この時点で経済主義者に対して一般に政治闘争を対することは、後退した彼等に歩調を合わせることになりかねない。

たとえば、出版労組の一部では、一人一票の組合大会に佐藤訪米阻止の政治ストを提起することを試みた部分があつたが、こうした方針は、組合を分解し、組合主義的闘争から転換を計るといふ過渡における戦術としての意味を持たせる限りでのみ革命的であるといえるのである。

にもかかわらず、組合員の過半数の指示を得ながら「組合規約による規定に達しなかつた」という理由をもつてストの貫徹を放棄するようでは、階級闘争の現局面から一周期遅れた、まさに、組合主義の枠内に止つた対応とみなされても仕様がなだらう。

組合主義闘争からの転換・決別は、質的にも、組織形態の上でも全労働者階級に鋭くつきつけられた課題なのである。

B、権力闘争の革命的原点としての反乱の権力による権力の打倒

資本主義的階級支配の特徴は、商品経済を基礎にして、経済的搾取過程からその暴力的維持機構が政治的上部構造として分離し、軍隊、警察、官僚によつて担われる中央集権的な国家権力として独自に組織されるといふ点にある。そして個々の経済的搾取過程からの階級支配の暴力組織のまさにこうした分離によつて、資本主義の国家権力は、史上最高度に組織され発達した最強力を究極の暴力となつているのである。

資本主義国家権力の強さは、その中央集権的な組織性と、従つて全国的な機動性と、職業的武装集団を基軸とする装備の優越性にある。

資本主義国家権力の特徴は、個々の支配階級の直接的武装ではなく、その下部組織に一般兵士や下級官吏等々として労働者階級の一部を大量に雇用する傭兵組織であり従つて、身分制的、特権的、閉鎖的な高級将校、高級官吏集団による上から下への権威主義的命令令体制を通じて、一般兵士や下級官吏の自発性を極度に抑圧することをその根本的な組織原則にせざるをえないといふ点にある。従つて、それを史上最強の組織暴力たらしめるそのおなじ中央集権体制が、同時にまた、その固有の弱点を形成しているのである。

我々のいう「反乱」とは、階級闘争を体制内的改良闘争に集約する機構が破綻し、権力闘争が真正面から問われている時点にあつて、個々の職場・地区におけるブルジョア支配の部分的カク乱から出発して全国的な麻痺を引き起し、プロレタリア権力の形成を追求する闘争であり、まさに、その意味で権力闘争、ソビエト運動の革命的原点をなすといえるだろう。

### ③ゼネスト論

戦後危機とそこにおける革命が、帝国主義軍事権力の崩壊ないしはマヒ状態に陥ることから権力闘争への一挙的な展開がなされるのに対し、相対的安定期・戦後体制の崩壊に伴う危機は、ゼネスト・占拠ストライキの拡大による行政執行権力のマヒを前提とするであろう。

戦後世界体制は、相対的安定期の産物たる議会主義的、組合主義的取引きの存立基盤の喪失を結集し、それに伴い階級関係の根本的再編を要請している。

日本ブルジョアジーは、この要請に応えるべく階級支配政策の転換を開始している。行政執行権力独裁強化、国内支配体制の再編、強化による世界資本主義の危機の反革命的乗り切りを成しうるか否かは、日本帝国主義にとつて死活問題となつているのである。

国内支配体制の再編に伴う抑圧と収奪の政策に対するプ

従つてそれは、一見無組織な、だが自由に自発的に行動する数十万、数百万の労働者大衆の直接的自己武装には對抗できないのであり、史上最強のブルジョア国家権力の打倒は、労働者階級の直接的武装とその中核隊たる赤軍に支えられた更に強力なプロレタリアートの権力組織IIソビエトの形成を欠いては不可能なのである。

プロレタリアートの蜂起とは、プロレタリアートが、自己を社会的主体であることを公然と宣言し、自らも確認する行為である。従つて、ソビエトの下での自己武装と生産管理を通して自らを訓練し、社会的主体としての自覚を、不断にとぎすましていく過程こそ、プロレタリアートをして蜂起そのものを担いうる主体への飛躍を可能ならしめる一大エポックをなすのだ。

### ④ソビエト存立の条件

中央集権的に組織された資本主義国家権力は、労働者階級の工場占拠や生産管理、武装が部分的である限り、それを容易に各個撃破し、鎮圧することができるといふ。

従つて、ソビエトの形成は、ブルジョア支配の全国的な麻痺を前提としなければならず、出発点にあつては部分的であるとしても、常にその全国的な波及・拡大を追求することがプロレタリアートの課題として避けられないものである。

プロレタリアートの自然発生的反抗をゼネストに組織するところこそ、ソビエト権力存立の前提条件であるブルジョア支配の全国的麻痺を可能にする唯一の道である。

ゼネストは、いかなる改良的スローガンを掲げようと生産過程におけるブルジョア支配の全国喪失のみならず政治過程の支配をも喪失させるが故に極めて政治的な行為である。何故なら、資本家的生産の労働者階級による全国的停止は、まさに確認したように、ブルジョア国家権力の弱点をあばきだし、全労働者階級の決起の前には、それが無力であることを暴露するからである。

ゼネストの意義は、一つにはブルジョア支配の麻痺であり、更にはゼネストという生産過程におけるブルジョア支配の即時的否定は、ブルジョアジーが精神イデオロギー的支配の物質的基礎である生産手段を支配しえないという事実の下に、更に高次な否定↓生産管理、ソビエトへのプロレタリアートの階級形成を可能にする客観的根拠を創出するところにある。

ここでの革命的左翼の任務は、ゼネストをブルジョア支配のさらに直接行動的否定たる占拠ゼネストに転化する方針をもつて労働者階級を分解しつつ、行動委員会に組織し、左派のヘゲモニーを拡大・強化してゼネストを実力闘争化、長期化させ、ブルジョア支配に対する打撃を徹底的に深化させること、更には、占拠ゼネストを生産管理、武装によ

るソビエトに転化させることでなければならぬ。

ブントは、「生産点II地域占拠、マッセストの中で実現されるプロレタリアートによる生産手段の占有を基礎としてソビエト形成」(理論戦線8号 坂論文)を展望する。即ち、部分占拠から一気に部分的生産管理に持ち込もうとするわけである。

しかしながら、商品経済を基礎に社会的分業が編成されている資本主義社会にあつては生産管理それ自体が社会的行為なのであり、労働者階級による生産管理は全社会的に行なわれる限りにおいてのみ、その存続を保證されるのである。

ゼネストという生産過程の全国的麻痺を媒介にしない部分的生産管理は、仮に存続しえたとしても資本主義的分業関係の一端をプロレタリア経営企業が担うという漫画にならざるをえないだろう。

#### ④都市反乱、地区制圧戦

ブルジョアジーの国内抑圧の強化とそれへの社民の屈服、反動的後退を考慮するならば、労働者階級のゼネストへの決起を樂觀的に期待することは決して許されない。

こうした状況を突破口とする道は、大都市の工場密集地帯、交通線の要地における都市反乱の展開により、機動隊を人民の渦の中に巻き込み、逆に包囲、分断してせん滅す

る闘いをもつて人民の忍従を強制している圧力を突破することと同時に、それによつて戦後階級闘争の敗北↓体制内の集約の表現である社民指導部のヘゲモニーを吹き飛ばし、プロレタリア大衆に闘いの方向と形態を明示すること以外にはない。

労働者階級の闘争を体制の枠内におしとどめて「平時のゲバルト」警察権力を無力化し、大衆の原始的エネルギーを解放し、ゼネストに結合させることこそ、都市反乱の革命的な意義なのである。

#### (二) 反乱闘争の現在の任務とその形態

##### A、職場反乱、対職制闘争

一月佐藤訪米強行↓日米共同声明↓一二月総選挙における自民党圧勝以降、政府支配者階級は大処分攻勢と本格的な職場支配維持、強化の攻撃に乗り出してきた。

職制こそ、資本家階級による職場支配の具現者であり、労働者に搾取労働を強制する資本家の手先きなのである。従つて資本家と組合官僚の取引きの下に存在した従来の組合主義的、体制内の改良闘争を乗り越えて前進しようとする労働者は、まず第一に個々の職場において資本家の飼犬II職制との徹底した対決を貫徹しなければならぬ。東京菱和の闘い、全通大崎におけるステはりをめぐる連

日の攻防戦、労学行動委員会による突入闘争、以降の大崎行動委による闘いは、闘う労働者の強固な団結の前には、職制が無力であることを暴露し、権力の直接的介入を引き出した。

我々は、大崎局においては勿論、他のあらゆる職場において職制粉碎の闘いを推進し、彼らとの不断の対決を通して職場の恒常的流動化II職場支配秩序麻痺の闘いを追求しなければならぬ。

こうした闘争を通して職場の労働者の意識をも不断に流動化させ、秩序意識からあふれ出させて従来の組合主義とは行動の上でも決別した職場行動委員会に組織化することが我々に要求されている。

職場、学園の行動委の相互の結合をもつて職場秩序を根底から破壊する連続的な職場反乱闘争を波及、拡大させ、広汎な職場反乱を基礎に地区反乱I制圧戦にまで発展させ、引き出した権力を部分的にであれ、せん滅する闘いを開始しなければならぬのだ。

これこそ、一月決戦以来、カサにかかつて攻撃していく支配者階級に鉄ついで下す闘いの第一歩であり、雪崩をうつつて敗走する反乱戦線を革命的に再構築する闘いの第一歩である。

##### B、組合解体、社民粉碎闘争

一二月衆院選における社会党の惨敗が示したようにそしてまた、我々が何度も確認してきたように、もはや、体制内の改良、取引き闘争の時代は終えんした。

ブルジョアジーによる職場支配秩序維持の攻撃が全面化し、総評、民同が無能を暴露している今こそ、取引き闘争をその党派性とするが故に階級闘争の阻害物に転落している総評II民同の実力解体が問われているのである。

崩壊を不可避とし、図体ばかりでかくて動きのとれない総評II民同に屈服し、組合主義の次元に後退するのではなく、彼らを左から解体して組合を分解し、真に闘う者の組織II職場行動委に再編する必要があるのだ。

##### C、新左翼の解体・反乱戦線の再構築

一月決戦敗北の本質的意義を理解しえず、敗北に無自覚であつた新左翼諸派は、階級闘争の冷厳な事実の前に反乱戦線の無力化への自覚を強制されつつある。

反乱闘争を反政府実力闘争に引き戻すことが革命的であると錯覚している彼らは、実力闘争すら放棄し、ある者は組合主義に、またある者は、反政府カンパニア闘争に逃亡を開始している。

三・一一中村君全共闘葬において具体的方針を提起した党派がわれわれを除いて一個も存在しなかつたという事実

は、彼らもはや反乱戦線の一翼を担う資格をもたず、われわれにとつては解体の対象にすぎないということをはつきりと示した。

労学行動委の形成・強化をもつて独自の反乱部隊の組織化を貫徹し、職場・地区反乱闘争の実践的展開を推し進める過程で反乱大衆を墮落した「新左翼」の下から切りはなし、反乱戦線の再構築、強化を追求しなければならない。

② ソビエト運動を切り開く組織Ⅱ 労学行動委員会を組織せよ!!

一〇・八羽田闘争以降の街頭制圧闘争の質は、学園大衆反乱Ⅱ 学園占拠闘争を媒介に学園に還元され、旧来の戦闘的自治会運動を越えた全共闘運動を生み出した。

学園占拠闘争の暴力的解体、学園大衆反乱の鎮圧と労働運動における組合主義の破産は、新たな反乱の中核部隊の形成、すなわち、学園・職場における行動委員会の組織化とその結合による労学行動委員会の登場を要求している。

体制内の改良闘争を乗り越えて闘う組織主体は、反動派にも中間派にも平等に一人一票を保証する組合型の組織ではありえない。

真に闘う部分による職場行動委の組織化とその革命的反乱闘争方針の提起と実践による大衆の分解、左派の武装に

よる権力、秩序派との対決↓粉砕、他の部分への方針の強制を通して左派のヘゲモニーによる戦線の再編、強化といつた全共闘運動の提起した一切の本質的問題が生産点における闘争にも問われているのである。

大衆反乱組織たる学園全共闘運動の再構築も、行動委を中核とした反乱闘争の爆発的な展開による権力の無力化を通して反乱戦線の大衆的再編を克ちとする以外は考えることができないのだ。

行動委員会こそ、職場、地区、都市反乱線、占拠ゼネスト、ソビエトの形成へと続く、ソビエト運動を一貫して支える中核部隊なのである。

# 「高校生反乱の直面している問題と今後の課題」

神奈川青共同高校生委員会  
(文責 山口)

司会 六五年慶大学費闘争から、六六年早稲田、六七年明大一中大へとうけつがれた学園闘争は、バリケードストライキ闘争を生みだし、全学生を巻きこんだ群集戦となつた点で画期的なものであつた。しかし、なによりも、右翼暴力集団の登場は、大衆的ゲバルト集団の登場を必然化した。

こうした、学園闘争の革命的発展と佐世保・成田・王子の闘いによる街頭制圧闘争の登場・発展によつて、そして、一〇・二一をへて東大・日大闘争によつて、学園叛乱は決定的に登場・拡大し、それ以降の、全国的な学園叛乱の爆発は、すぐれて、階級的な闘争となつた。そして、それは、われわれ高校生にも無縁ではなかつた。高校への進学率は、全国平均七六・八%となり、ほとんど義務教育化されている。こうした義務教育化に比例し、管理体制は確立され、この体制(一般に言うところの受験体制)を、押しつけ、容認させる為に、「大学進学」というエサをチラつかせた。しかし、学園叛乱によつて

それは、完全に粉砕された。学園叛乱は、「大学」の幻想を取り払つた。それによつて高校生は、驚き、あわて自らの日常性を振り返らざるを得なくなつた。そしてそこに、管理されている自分があつた。更に、現在の「教育」が、われわれ労働力・商品のふりわけ機構としてあることを発見した。それに対する怒りは行動へと移つた。それは、六九年春の卒闘となつて、同時に全国的に爆発・継続された。しかし、それは、個人的次元の闘争でしかなかつた。神奈川においても、とりわけ希望ヶ丘高校においても、六九年卒闘は、画期的ではあつたけれども、個人的闘争の次元にとどまつた。しかし、そうした限界を克服して、七〇年の卒闘を文字通り、教育秩序に対して、総叛乱する突破口とする為に、そして、それを背景にして、あらゆる労働者・大学生等と連帯して、地区労働高叛乱共闘の一翼を担い、全人民的総叛乱の先頭に立つことを、公然と宣言する為に、希望ヶ丘高校において、二・二八卒闘勝利全神奈川高校生総決起集会を設定した。

そして、他四校と共に卒闘貫徹実行委員会を結成、二万枚の統一ピラを全神奈川に配布したが、当日は、全学ロツクアウトと百数十の機動による希望ヶ丘地区クリーンアウトによつて事実上集会は貫徹できなかつた。そしてこの間の活動を通して、その成果とその意義、また、希望ヶ丘全共闘内部の問題点、同盟とのかかわりの問題が出てきた。具体的には、まず、結集方法の問題、これは明かに、希望ヶ丘高校と他校の突入部分とは変える必要があつた。即ち希望ヶ丘高校での結集は自校での独自闘争を含んだものでなくてはならなかつた。しかしながら、ピラまき活動が主軸になつていたことは、希望ヶ丘高校での独自の大衆結集が第二義的にされてしまつたことを意味する。そしてこれは、当日、希望ヶ丘高校での一般生徒大衆が分散化してしまい、ロツクアウト抗議闘争が組み得なかつたことを考えるならば、この問題は、決定的重要性を持つている。しかし、これに対し、突入部分の中の行動隊に加わつた高校生の結集は、注目すべき位置を持つていた。それは、一般的にピラまきによるものではなく、ピラまきの質を超越して、叛乱的性格をもつたものになつていた。具体的には、次の三校に端的に現われている。

## ① 日校の場合

日校でのピラまきは、二日間にわたつて行われた。第

一日目は、一五人余りの教師による二人のピラまき部隊への弾圧により、一枚もまくことができないという事態が生じた。それに対し、われわれは、十数名のメット部隊によつて、ピラまき、アジ、門前制圧を行ない、弾圧を粉砕した。これは一般的なピラまき活動をはるかに超えていた。それは、この闘争をステップにして、二・二七日校校内集会を勝ち取り、日校闘争を飛躍させる要因となつた。

## ② I工専の場合

I 闘委の結集は、当局側の二・二八集会参加者は処分する、という弾圧に対し、処分粉砕闘争までも意識化して結集した。

## ③ T高校の場合

T 闘委革命派の部分は、自主卒業式保守派の粉砕を勝ち取つて結集したものである。

以上まとめるならば、高校生突入行動隊と、一般高校生の結集に全力投入してしまい、希望ヶ丘高校での結集がおろそかになつてしまつた。つまり、一般高校生大衆・高校生突入行動隊・希望ヶ丘高校というふうに、それぞれ独自の結集方法が必要であつた。このことを確認するならば、その組織体制は、希望ヶ丘高校に責任を持つ部分、この場合は、希望ヶ丘全共闘と、高校生突入行動隊に責任を持つ部分と、それ以外の一般高校生に責任を

持つ部分というように、三者の連関任務体制が必要となり、希望ヶ丘全共闘を中心にして、拠点校+支援共闘という体制こそ必要とされていた。これに平行して同盟体制の任務分担も、当然必要になるわけである。一例として、希望ヶ丘全共闘と同盟との連関関係について生じた問題点について触れておくと、まず、希望ヶ丘全共闘での内部討論が熟しきれない状況において、同盟内部で決められた方針を貫徹しようとした為に、全共闘内部に主流派・反主流派の二分解が生じてきて、反主流派の二年の部分で、セクト・アレルギーも作用し、戦線離脱という事態が生じてしまった。このことは、特殊希望ヶ丘としてではなく、全共闘主流派をとっている高校の場合、いかに、同盟の指導性を貫徹するかという点に集約される。

希望ヶ丘全共闘の指導上の無理は、一人の同盟員（議長）が全共闘内部の結集と、同盟としての方針貫徹という二つの活動を同時に負わされていたことにある。同盟の指導性は、全共闘内部の論争を通じての方針が、同盟の方針と一致するという点にあることは、いうまでもない。その為には、たえず全共闘大衆と接し、彼らの問題意識を集約する部分と、同盟の方針を全共闘に即した形で提起して、大衆を引っぱつていく部分との、結合がなされなくてはならない。すなわち、全共闘総体を指導し

けて、三・六ロックアウト抗議・卒闘勝利全学総決起集会を設定し、その集会の場で、指導部教師のつるしあげを行った訳だが、その場でも種々の問題点が出てきた。一つには、教師追及の消耗感、希望ヶ丘高校においては、バリケード封鎖以後の全学集会において徹底的に教師追及を行った。故に再度追及しても何も成果を期待できないう消耗感。

そこから出てくるところの、全共闘の今後の飛躍した任務問題等々。

以上のことを確認して、今後の高校生叛乱の展望・課題について討論してもらいたい訳です。

Y君 希望ヶ丘全共闘の主要な獲得目標は、全共闘再建にあつたわけで、二・二八↓三・七卒闘を通して、全共闘再建を計つたわけです。その上からも、三・七卒闘は決定的な意味を有していた。具体的には、三・七当日、式を人民裁判へと移して、教師追及を行なうところに意味があつた。つまり単なる一発的闘争にしない為にも、教師追及は死活だつた。しかし、一般生徒に、それだけに強烈だつた「再度教師追及をしてどうする」と言われて、皆、考えこんでしまった。そして、結果的には、三・七卒闘は不発に終つた。

きる為には、同盟支部がその内部に形成されなくてはならない。この支部建設は、同盟活動の原則の問題というだけでなく、すぐれて実践上の必要事となつていのである。以上のさまざまな問題点等により、それによるころの、大衆結集の失敗によつて事実上爆発を勝ち取ることができなかつた。しかしながら、基本的成果としては次点が確認できる。

① 神奈川において叛乱闘争を公然と提起したこと。  
② 叛乱派高校生の結集→高校生叛乱の基礎的単位を形成できたこと。

③ 同盟が叛乱指導部として公然と登場したこと。  
④ それを通じて、同盟の体質改善→叛乱闘争を準備し、切り開き、担い、勝利して行く組織としての同盟建設の第一歩をふみだしたこと。

そして、何よりも、神奈川において他セクトに対し、公然と、叛乱闘争を指導して行く主流派であることを宣言したことにあつた。そして今後の課題としては、権力の集中攻撃によつて後退局面にある現在、いかに現場叛乱を形成していくかという問題に、同盟が真正面から、理論的・組織的に答えられるか否かということである。二・二八によつて生じた問題点は、主要にはこの点にあるといえる。

そして、希望ヶ丘内部で、三・七卒業式粉砕闘争に向

J君 T校でも、卒闘を設定した。この場合自主卒業式を守る民青・革マル系のT闘委マル研派とそれを粉砕することをスローガンにするT闘委革命派とのゲバルトをまじえた党派闘争を軸に、やはり、人民裁判に式典を移すというところに意味があつた。しかし、希望ヶ丘と同じような問題点が生じて、当日は、火炎ビンが運動場に投げられただけに終つてしまった。

司会 これは特殊希望ヶ丘・T高校の問題ではない。それは、闘争を経験した高校においては、七〇年卒闘が爆発していないということを見ても明白である。

即ち、六九年の闘争の質と、七〇年卒闘の質が何ら変つていないということを示している。それでは、六九年の闘争の質とはどういうものだつたのか、希望ヶ丘高校の経過を述べておきたいと考えます。

希望ヶ丘高校の場合、三期に分けられる。

#### ① 第一期

一バリ封まで（先進的部分を先頭にした闘争の開始）→六九年卒闘→三年中心にピラミキと造反答辞→当局側の弾圧

それを契機に、記念祭（文化祭）では、新聞委員会が「高校生運動」を問題にし、それ以後、新聞等に関する検閲制を問題にし、生徒総会にかける。更に、羽仁五郎

の構演会をもつ。

以上による意識部分の形成と、その部分の主体的な闘争参加(街頭闘争)。校長の移動↓反動校長として有名な校長の配転、それによる生徒の急激な反発。そして一月。一〇・二一国際反戦デーのステッカーがはられる。

一〇・一〇希望ヶ丘高校闘争委員会(希闘委)結成。第一回集会で分裂解体。

・組織体制の不備(委員長すらいない)―責任部分の欠落。

・話し合い路線の強調、それによる当局の攻撃に対する無力さ。

分裂以後、三七日において、連日、授業をつぶし、討論し、当局に対して、生徒指導要領に対してどう対処するか、からなる「公開質問状」をつきつけた。

一〇・一九前後:指導部・校長の三七日まるめこみ開始、それに対する生徒側の徹底的追及、校長逃亡。

一〇・二〇:管理体制への叛乱を確認。

一〇・二一:新宿。

一〇・二二:戦術会議―バリケード封鎖の提起、決定。

一〇・二三未明:「定期試験徹底」 「誓約書廃止」 「学則徹底」の三項目要求をにかけて、バリケード構築。

②第二期

―高揚局面、全学集会へのエスカレート(スト権確立)―

いうどう喝)と、授業再開による分断工作。それによる全共闘に結集した部分のほとんどの諸君の脱落。冬期休業。

七〇年、二・一五:厚木闘争全学総決起集会。それに対する当局の弾圧、私服の配置、導入。

二・二八卒闘勝利全神奈川高校生総決起集会の設定。実行委結成。バク進体制それに対する県教委の弾圧。当日の機動配置、全学ロックアウト攻撃。

三・七卒闘の不発―全共闘内部の消耗感による。

Z君 何に対する消耗感が説明がほしい。

I君 今も報告があつた通り、一ヶ月間の連続全学集会で徹底的に教師追及を行なつた。これは強烈なもので、人間不信におちいつて重症ノイローゼになつた人もいるくらいで。そして、Yさんからも説明があつたように、三・七卒闘も人民裁判の場にするところに意味があるた。実際には、再び教師を追及するだけに終つてしまふ。判決を下すことは不可能であり、力量もない。そういつたことから「再び教師追及をやつても始まらない。」という意識が、闘争を通じて消耗感としてあらわれた。つまり、「自分達には、これだけしか出来ない。やつてもしょうがない。」という意識ですね。

一〇・二三当日当局は、一、二年はあいている教室において授業。三年は講堂にて出席確認。帰宅を掲示。それに対して、スト派は、全学集会、スト権確立を要求。六〇〇名余の賛同者と共に、授業中のクラスに呼びかけ、授業粉砕掲示撤回させた。

全学集会にてスト権確立。全学スト突入宣言。圧倒的多数の賛同。

そこにおいて、朝鮮人生徒K君の感情的訴えを媒介にして、教師追及がおこなわれた。それに対して、絶口してうつむくもの、職員室、研究室に逃げこむ者、個人的告白をする者が、日曜登校による一ヶ月余りの全学集会のうちに、教師の管理者々としての姿を余すことなく暴露しつくした。

一〇・一三前後、全学共闘会議結成。

第一回強行試験攻撃に対し決起。全学集会の場で当局の自己批判を勝ちとり撤回させた。

③第三期

―後退局面、当局の攻撃強化―

当局のタイムリミット攻撃、全共闘に結集する部隊の大量脱落。

一月中旬、第二回強行試験攻撃。それに対する全共闘に結集する百余名のボイコット闘争と大量の白紙提出者。活動家に対する当局からの単位攻撃(単位を与えないと

司会 今のI君の発言をまとめると、これまでの高校生運動は、文部省を頂点とするところの管理体制の打破を叫びながらも、いまだ、暴露の段階に終つてしまい、現実、それを解体する展望を欠いている。となるわけだが、この限界を今後いかにして、突破するかが問題になつてくる。

O君 その為には、まず、文部省を頂点とし、教師を底辺とする、管理体制、特に、現場で担つて行く教師の立場位置を明確にする必要があるのではないか。

Z君 そうだと思ふ。そうすると、特に、勤評闘争敗北以降の教師の位置が問題となる。

司会 勤務評定が、管理体制確立の為に、教師に、その一環を担わせるという点にあると、これを確認するならば、五六―五八年勤評闘争に敗北し、全国的に勤評制度が実施されると、当然ながら、日教組は急激に体制内化を深め、管理体制の一環を担うようになる。このことは、日教組の弱体化と、官僚化に端的にあらわされている。また、日教組(既成左翼)は一貫して、戦後憲法・教育基本法の理念を、つまり、民主主義イデオロギー(話し合い、非暴力等)というブルジョアイデオロギーを絶対

化して来た。しかし勤評闘争敗北以降は、それさえも空洞化し、内容的に、国家統制、帝国主義的再編が進展している。

丁君 ということは、勤評闘争敗北以降、教師は管理職たることを強いられてきたといえるし、日共の言うところの「教育労働者」としての教師という立場も必ずしもそうでないとは言えないと思う。

Y君 教師には、二面的性格がある。それを生みだした、決定的なものとは勤評と言えぬ。では、どういう性格かというところ、一面として、勤評によるところの「管理者」・「職制」であり、他面としては、「教育労働者」に他ならない。しかし、現在のには、「管理者」としての「教師」の位置が「教育労働者」としての位置を、おぼつてゐる。良く言われる造反教師は、この管理者としての位置を自ら捨て去ろうとする教師であると思う。

司会 今、T君、Y君から、「教師」の持つ二面的性格というものが述べられた。更にY君の方から、この二面的性格に即して、造反教師の問題が出された。それでは、実際に、造反教師と生徒とが共闘している葛西・城右高校、特に葛西工においては、五人の造反した教師と生徒

Y君 教師の造反がもつ意味は、教師が管理秩序の底辺に位置し、その造反は、管理秩序内部からの叛乱となる点で、決定的な意味を持つ。

Z君 高校戦線が全国的に後退している中で葛西工、城右高が、生き生きとしたダイナミックな運動を展開していることから見ても、造反教師の問題は、今後の闘争の課題となる。結局、ここで問題になるのは、いかにして、造反教師を創出するかが問題になるのではないか。

司会 造反教師の問題は今後の闘争の課題になるという、Z君の意見が結論になる。それでは、更に、いかにして創出するかというZ君の問題提起について討論したい。

Y君 葛西工の場合は、生徒叛乱によつて、教師叛乱が生み出された。このことは一般的に、教師にオルグをかけた、造反させることの無意味さをむしろ、それよりも絶対的に不可能だと言ふことができる。

O君 確かだと思う。教師の本来の性格が、「職制」という点にあるのを確認するならば、教師を造反させる為には、激裂な闘争を通じて、二者択一を迫るところに始めて、その突破口を見いだすことができるのではないか。

の共闘によつて闘争を担つていつている。これは、他の高校とは異なる点である。そして、この五人の教師は当然処分が出されて、造反教師の主要な闘争の軸は、処分紛争・就労闘争にあるし、生徒側はその闘争に対し、共闘している。特に注目すべき点は、少数派教師（当初五人、現在一人）の、弾圧機構としての職員会議ポイント、それから全共闘と共に秩序派教師とその教育秩序への対決を開始したところに、ある。それでは、このことが、何を新たに提起しているのか討論をにつめていきたい。

O君 教師の位置の問題が重要になるが、基本的には、二面的性格というY君の意見がいいと思う。そうであるならば、造反教師を生み出すということは、闘争発展の死活問題として出てくる。

I君 また、教育秩序における教師の立場・位置を見るならば、以上述べられてきたように、勤評により「管理者」たることを強いられてきたことが問題になる。つまり、教育秩序総体に対する叛乱は、生徒のみの問題で無く、教師の造反という点に特に、それ故に真向うからの叛乱になる。

I君 造反教師の創出という問題が、いかに甘くないかというところを、確認しておかなくてはならない。それが故に、闘争が自らの問題として出てこなければ真正面から闘争に対することをしないという性格が常にある。

J君 自分に直接関係するものは、大衆団交の場にひきずり出された時だと思う。現在までに、あらゆる高校で、全学集会（大衆団交）において教師追及を行つてきたが、その追及に甘さがあつたのではないか。

O君 ということは、全学集会というものが、どういうものであるかが問題になる。教師を造反させるという任務を持つものならば、その質というものは過去のものより飛躍的に高くなるわけではない。

司会 希望ヶ丘高校の全学集会の事実経過を述べて、それを資料に、今後の全学集会のありかたを討論して行きたいと思う。

希望ヶ丘高校では、バリ封の翌日、スト権確立・全学スト突入、全学集会続行が宣言され、朝鮮人生徒の涙の告白に、「なぜ、そういつた矛盾を教育によつて知らせないのか」という疑問から、教師に対する追及が開始された。この間、校長は一貫して県教委に入りびたりで、

そのことについて「あなたならどう対処するか」という質問に対しての回答をめぐって、教師間の派閥問題が暴露され、更に、一〇・二一闘争に参加した多数の生徒の写真・名前を公安に渡したことが暴露されるにいたつて「教師」に対する幻想を一般生徒までも捨て去つた。それから強行試験の自己批判などもさせたりで、高揚局面にあつたわけだが、当局側からの攻撃に対して、更に教師のあまりの墮落に怒り疲れた為に、検閲制廃止等々の改良主義的な闘争に移り、あとに残つたものは、ニヒリズムばかりだつたというわけである。

Y 君 再三言うけれども、教師追及は闘争の起きている高校ではどこでもやつている。しかし、それはあくまで追及に終つてしまつてゐる。つまり追及して暴露したら「教師は、生徒の眼前から逃亡しよう」とし、生徒は、教師を、下等な生きものとしか見なくなる」に終つてしまい、そこから、自然にニヒリズムが出てくる。現在の高校戦線の後退は、確かに権力側からの、むきだしの暴力による弾圧によるものではあるが、単にそれだけでなく、以上述べたことも原因してゐると考えられる。

J 君 これからの全学集会というものは、厳密な意味での「人民裁判」にあると思う。今までのものが、暴露に意

味があつたとするならば、これからは、造反教師を目的意識的に創出するところに意味がある。

I 君 そうなると、今後の全学集会・大衆団交というものは、教師に対する、われわれからの二者択一を迫るところに、最終的つめがあると思う。

Y 君 つめの持つ決定的な意味は、二者択一を迫ることにもあるが、それよりも、「人民裁判」としてあるからして、当然にも、人民による「判決」と「刑の執行」が必要とされる。この「判決」と「刑の執行」が重要な意味を持つてゐると思う。

O 君 ということは、造反する教師に対しては、業務拒否宣言を強制し、なぜならば、「処分権」「成績評定」というものは教育秩序の環をなしている。そういうつたもの一切の業務拒否宣言は、真向うから教育秩序に叛乱することになるし、それが造反宣言となるわけだ。また、造反しないで、秩序派に回るものには、例えば「判決」として、放校を下し、「刑の執行」として、人民による校門ピケにより、秩序派教師を一步も校内に入れない。ということとは、その高校での秩序維持機構は完全に麻痺したことになるし、文部省を頂点とする「教育秩序」に

対して、真向うからの叛乱を巻き起したことになる。これをやるには、ゲバルト部隊の登場が必然となる。

司会 全学集会の今後の課題は、それが、「刑の執行」を伴うまでの「人民裁判」形式であり、教師追及から更に教師に対して、例えば「教育者」か「管理者」か、の二者択一を迫り（これは当然にも逃亡をゆるされないものでなくてはならない）、「執行」として、判決を認めたものには、業務拒否宣言を強制し、認めないものには、ゲバルトをまじえて、徹底的にこれを粉碎し、放校する。という任務を持つところにある。あけて全学集会・大衆団交の今後の課題はこの点にあると言える。

(つづく)

# 工場突入闘争論

伊志井 創

## 一、序論

戦後革命の挫折を経て、日本階級闘争は、そのたい内にプロレタリアートの「権力意志」をはらみつたある。

今や、「権力による権力の打倒」へ、二重権力創出への止揚、蜂起、世界革命戦争勝利へ、即ち、権力闘争の勝利へと、わがプロレタリアートの闘いは間断なき進撃過程に入つたのである。

その日本階級闘争のおかれている現在の状況を確定する内から、その作業を通じてわれわれ自身の権力闘争における任務を、とりわけ、われわれが唯一、目的意識的に遂行

してきた「工場突入」闘争との関連において、再確認してきた。

ここでの目的は、共に「突入」闘争を闘つてきた多くの同志から出された総括を、統一的に把握する為の、一礎石を提出することにある。

## B 情況と戦略

六八、六九年、全国的規模での学園占拠闘争を展開してきた日本階級闘争は、六九年、一〇、十一月へと向かう過程で、学園バリケードをめぐる国家権力の準治安軍機動隊との攻防戦に敗北し、ブルジョアジーから先行的にかけられた十一月「決戦」敗北後、ズルズルと敵階級の攻勢局

面へと引きずりこまれていく。

このことは、革命戦略上、一体、如何なることを意味するのであるか。

一部の学園においては、自治会主義との悪しき結託等々により、全共闘運動が種々の限界を内包していたとは言え、多くの学園全共闘が展開してきた大衆的学園占拠、武装闘争の革命的意義を確認するならば、そのような点にのみ現情況の根本的問題点、全共闘運動の「限界」点を見出すことのできぬのは、自明であろう。

現在の情況の戦略的諸問題の基礎は、学園占拠闘争が、学園占拠・工場占拠ゼネストへと自己を止揚し得ず、中途はんばに挫折した点に、基本的には設定されなければならぬ。すなわち、学園の大衆的武装占拠闘争が工場占拠闘争へと大規模な環流を為し得ず、部分占拠反乱が部分としてとどまつてしまい、かかる武装占拠闘争、資本主義秩序への根底からの逆行行為を、まさに全社会的に推進し得ずして敵権力の準治安軍機動隊を先頭とする各個撃破攻撃を受けていつたこと、また、そのような情況の到来をのりこえうる戦略的任務をもつたものとして全共闘の飛躍をかちとれなかつたこと、としてある。

占拠主体自身がいかにか観念しようとも、占拠闘争そのものは、ブルジョア支配秩序に対する根底からの逆行、非和解的敵対宣言以外の何物でもない。ブルジョア国家権力に

とつて、自らの支配秩序が貫徹し得ぬ部分が社会の内存在することは「権力」としての自己の破産を宣言されるに等しいし、ましてや、占拠闘争と不可分一体な人民の直接武装の大規模な進撃を見るにいたつては、「許すべからざるもの」以外の何物でもあり得ない。かかる事柄からしても、占拠闘争は、それが占拠ゼネストとしてブルジョア支配秩序の全般的マヒに高められるまで、ブルジョア暴力装置による各個撃破、解体攻撃は不可避的である。

さらに、学園全共闘運動が労働者ソビエト運動に占める位置からして、それらは確定的となる。学園は、勿論、資本の直接の生産過程ではない。つまり、学園占拠闘争・学園全共闘運動がブルジョア支配体制に対する根底からの逆行ではあり得ても、一切のブルジョア秩序の根源をなすところの資本の生産過程そのものを打倒し解体する闘いとは、直接にはなり得ない。学園全共闘運動は、労働者ソビエト運動の現実的、一翼へと自己を実現して行くことによつて、その部分性・限界性をのりこえ、「学園ソビエト」として定立されることが可能となる。そして、学園全共闘運動に問われていた根本の課題は、単なる「空間獲得」運動として消極的に占拠の維持を計ることではなくして、まさに労働者ソビエト運動の現実的、一翼を担つて行くものとして、自己を止揚することに全力を注入して行くこと、そのため、武装闘争の質を、「自衛武装」の視点のそれから、占拠

の拡大・波及—その為の機動戦の視点へと転換させることであつた。かかる戦略的・目的意識性によつて武装し、占拠武装自衛から、敵権力の全面どう喝—各個撃破攻撃を粉碎し、部分から全体へと反乱を大規模に環流させる媒介項として、現在の街頭戦—敵の弱点におけるわれわれの総力逆どう喝戦としての都市反乱・都市人民戦争の貫徹と、闘争の波及の具体的実力戦術—工場・戦場突入闘争による資本の「聖域」の攻撃を遂行し得る部隊への発展、このことが学園全共闘に問われていたのだ。

これに対し、占拠闘争の本質的意義を見ぬけず、一面的御都合主義的なスローガンを持ちこみ、それに街頭「政治」闘争を何とか「接木」しようとする腐心し、「政治課題」をスローガンとして「持ちこみ」さえすれば何とかなると、あたかも、外的に政治スローガンを持ちこめば「個別闘争」が「全人民的闘争」に高まるかの如くに思いこみ、百年一日の如くにそれを追求しているのが小ブル反帝主義者諸君なのだ。彼らは、われわれの言う「権力闘争の開始」という認識を、本質的に理解していない。せいぜい、フロントの如く、「権力闘争への突入」のメルクマークを「権力の弾圧が強化され・・・」と点ぐらいにしか、すなわち、反帝闘争一般の激化と言う程度にしか把握できていないのである。

また、赤軍派も、「権力闘争」を、それに至る過程—蜂

の本質的意義を一切確定し得ていないし、必然的に階級闘争の現在の質、到達せる地平に無自覚・盲目であり、いわんや、街頭戦の戦略的位置を確定することは不可能な事なのだ。現段階の街頭戦の戦略的位置を理解し得ぬということは、すなわち、わが同盟の闘つてきた「工場突入闘争」の意義を理解することは、本質的に不可能である。

今や、大衆的武装占拠闘争の学園における大規模な展開の過程は、日本階級闘争の到達した地平を、権力闘争の萌芽的開始という形でわれわれに知らしめ、まさにその地平から街頭闘争に対する現在までの観点の根本的転換を要求している、ということなのである。

五〇年代後半から六九年秋期に至るまで、街頭闘争は多かれ少なかれ種々の「反対闘争」の街頭実力形式でしかなく、六八年一〇・一一新宿闘争とわれわれの闘つた六九年一〇・一一一月新宿闘争が、それを突き破る可能性を程した以外は、本質的に「圧力闘争」の域を出るものではなかつた。かかる「〇〇反対」意識、すなわち、支配階級の政治攻撃に「抵抗」して街頭で「象徴」に対して闘う、という意識の延長線上に現段階の街頭戦を闘わんとする部分の破壊は、六九年四・二八で確定的となり、一一・一六で最終的な宣告を受けた。それらが現象的には激しく闘われたとしても、本質的に「〇〇実力阻止闘争」「象徴に対する闘争」を出ない以上、ブルジョアジーの先行的政治攻撃と実

起に勝利する条件を展開しえずに「権力奪取」と直観し、プロレタリア独裁権力構築の先進資本主義国—帝国主義本国内における、その内実を欠落させて、ソビエト運動を否定的に捉え、現在では、それを語る部分を「生産的主義」と断罪している。故に、プロレタリア権力創出の課題から不可分なプロレタリアのプロレタリアートとしての階級形成—大衆武装の獲得の課題を根底的に欠落させるに至っている。彼らは、資本主義社会の歴史的特質の基本点の把握の欠落、即ち、階級対立・支配・搾取の過程が商品経済秩序によつてインペイされ、資本の自己運動として、物化され疎外された形態でしか即自的にはあらわれない、と言うことすら忘れさり、現在の「蜂起」の決行を「前段階蜂起」として訴え、その当然の帰結として「勝利的政治危機創出」—人民の決起のシエーマとして、つまり、ショック療法階級形成と、一方での「軍」への結集と言う一本づり階級形成との接合という形でしか「権力主体」の形成を語り得ていない。

ともあれ、多かれ少なかれ、「政治闘争」と「経済闘争」の「結合」論にひつかかつた全共闘大衆は、そこから、セクトの「政治闘争—経済闘争」にひきまわされた・・・と言う消耗感を生じられ、悪しき学園主義と、クーデター主義への心情的傾斜との分解を生み出しつつある。

小ブル反帝主義者は、全共闘運動—大衆的武装占拠闘争

力粉碎体制の枠の中にスツポリと包みこまれた「大量逮捕シヨウ」でしかあり得ない。かかる「抗議」「反対」闘争の延長線上にしか現段階の街頭戦を想定し得ぬ部分は、いかに「革命的言辭」をもてあそぼうとも、戦略的破壊を余儀なくされているし、一一・一六蒲田闘争に見られた如く、左派大衆に対する反動的引きもどしとして、歴史の歯車を後ろに引き戻すものとして現象することになる。

小ブル反帝主義者諸派に対する批判は、ここでの主要な目的ではなく、次の機会に行ないたい。要するに、時代は今や、権力闘争期に突入しているということであり、とりもなおさずそれは、武装蜂起—世界革命戦争勝利—世界プロ独樹立—世界共産主義の向目的性で武装され、それを具体的に推進して行く革命党を、一切の小ブル反帝主義とは無縁な地平で要求しているということなのである。

さらに言えば、階級闘争は、戦術的短射程内にあるものとしてわれわれに突き出しているものであり、もはや、革命の具体的プログラムを持たずして一切の闘いの前進は望み得ぬのであり、われわれが権力を樹立するか、ブルジョア階級が反革命として乗り切るか、のプロレタリアート対ブルジョアジーの史上四度目の死闘の結着を問う過程に入っているということなのである。

かかる時期に至つて、われわれと小ブル諸派との党派闘争の意義は決定的な重要性をもつてくる。彼らは、開始さ

れた権力闘争を、六〇年代反帝闘争一般へと溶解させようとする反動的敵対物へと転化する必然性を有するのであり、かかる革命を死産させることしか知らぬ部分との根底的な党派闘争に勝利することなくしては権力闘争の具体的推進は抱えない。

それ故、小ブル諸派は、われわれによつて、すみやかに解体、ないしは分解されなければならない。

#### ○ 工場突入闘争と戦略

先程から観てきた如く、占拠闘争と街頭戦の関係を「二重権力」状況の創出の点において把握するならば、職場・工場突入闘争の戦略的位置については自明である。

それは、現在のには学園占拠闘争の生産的への拡大・波及の媒介項として、より普遍的には占拠闘争の拡大・波及の実力戦術としてある。即ち、部分占拠↓占拠ゼネストへの進撃の為の一つの重要な戦術として、占拠闘争を目的意識的に押し抜けていく実力闘争として存在する。

労学を問わぬ反乱部隊による他工場・職場への実力突入↓かくされた内乱の公然化↓占拠へ、これこそ、先駆的占拠反乱から二重権力状況を創出するために、街頭総力戦↓各個撃破攻撃とそれによる反乱大衆へのどう喝攻撃に對するわれわれの総力逆どう喝戦とならば、今一方の戦略的環としてある戦術形態である。

占拠闘争の有する革命的意義を理解し得ぬ部分がほとんどであること、これらの点から、「工場占拠」の闘いについて若干、触れておきたい。

周知の如く、われわれは近代労働者階級の闘争の根源的革命的性を、その労働過程の内こそ見出し出した。

資本主義的階級関係の歴史的特質として、まず指摘されねばならないのは、その階級支配と搾取の関係が商品売買関係に全面的に、おぼわれているということ、即ち、資本主義社会の表皮世界としてあるのは、商品売買者相互↓労働力商品の売手と買手、の特殊利害をめぐる闘争一般ではない。

これに対して、資本主義社会がそのエセ「自由平等」性を暴露せざるを得ないのは、まさにその根本動力たる資本の生産過程そのものにおいてなのである。

資本家は、購入した労働力商品を、自己にとつての使用価値として発現↓消費せしめ、そこから剰余価値をひき出すために、労働者を工場に産業軍として「組織」し、他の生産要素と結合↓消費し、それにより新たな商品生産物を得るだけ安価に生産しなければならぬ。だが、労働力を商品化することの矛盾からの規定性を免がれ得ないところの資本の生産過程は、一方では、労働者を生産手段に對する純粹の生産主体として定立し、他方では、生産手段の全くの附屬物として定立しようとする矛盾の過程以外の何

だが、突入↓占拠が、即目的に実現されるものと観念されてはならない。階級対立の激化↓顕在化の過程と見合つた形で、その可能性はにつまりをもつてくるのであり、現代帝国主義の合理化攻撃等々↓職場の資本主義秩序の強化と、それに真正面から対決する行動委運動の進展との相関関係で計画されなければならない。圧倒的な職制↓工場憲兵秩序を暴露し、粉砕し、大衆を流動化させ、分解させることにより、資本の「聖域」に荒々しい階級闘争の息吹きを持ちこみ、左派への結集を促進させるものであり、より進化した形態においては、職場支配秩序の実力粉砕・解体としてある。

このとき、突入部隊は二種の敵対物をもつ。階級敵と階級内部の闘争防衛者↓社民・日共・右派である。突入部隊の武装の質の問題は、これら二者と、大衆の意識状況と、二点の関係において決定されるであろう。このことは、階級状況のつまりとの関係で、より決定的なものとなる。

前者は官憲との対応↓軍事的戦術を明らかに含むものとして考慮されるし、後者は、内部階級闘争の深化・発展の問題として、基本的にふまえられていくであろう。

これら、突入闘争に伴う具体的諸問題は、以降の総括作業を通して提出することとする。

ここで、補足的にはあるが、われわれは突入闘争を「占拠闘争」の追求の戦術として設定していること、だが、

物でもないのである。

表皮世界を取りはらつた後にこの本質↓資本主義的生産過程にあつて、プロレタリアートのブルジョアに對する闘争は、種々の手段で他人に労働を強制し、剰余価値を搾取する支配階級に對する労働生産主体の抵抗と叛逆の闘争として、純化されてあらわれる。ここにおいて、資本主義社会における階級闘争は、もつとも純粹な階級闘争↓搾取する支配階級に對する労働生産主体としての人間の普遍的な人間回復の闘争となり得るのである。

かかる論拠をもつて、われわれは敢然と即目的革命論↓貧民革命論にプロレタリア革命論を対置してきたのである。即ち、一切の階級の止揚↓人類の類的結合をもたらすものとして資本主義社会における階級闘争を措定せよ、と。

以上の原則的な資本主義社会の歴史的特質の把握と、そこからもたらされる労働者階級の革命的性の措定は、とりわけ先進資本主義国↓帝国主義本國における革命論を定立するとき重要な要素としてある。

近代労働者階級の闘争は、資本主義の発達↓近代工場労働者階級としての形成によつて、ならざるを得ない。生産過程における闘争は、資本家の生産過程の支配と統制に對する抵抗と叛逆の闘争として自己を表現するのであり、これに對した形で、労働者階級の闘争組織は、その発展に伴つて、生産過程の内部における組織に直接依拠するもの

となり、旧来の「共同体」から純化された労働生産組織を階級闘争組織へと発展させるのである。

かかる生産過程と生産組織に依拠する闘争は、種々の「敵対物」との闘争や、時間的・物理的制約や規定され、工場占拠闘争↓自主生産管理⇨生産過程の労働者管理の萌芽的開始として、即ち、半即自的否定から向目的性をもつた否定、へと突き進み得るのであり、また、それとの相關関係で、バリ、ピケの組織、内部階級闘争⇨内ゲバの貫徹、種々の妨害物との闘争を通じた武装として、大衆武装を展開せしめる。

工場占拠闘争が、生産過程の資本家支配⇨資本主義的生産関係そのものに対する真向うからの叛逆を意味せざるをえず、そしてこの生産過程の資本家支配を維持することに資本主義国家の「法と秩序」の根本が存する以上、占拠闘争は、資本家階級とその国家権力との真向うからの武装対決は不可避である。

このように、工場占拠闘争は、生産組織を直接武装権力へと発展させ、労働生産主体の自己権力組織を、敵階級との対し、それをもつての逆包圍戦を展開しうるという意義を、その内に有する。

先進国革命論は、以上を基本的な立脚点として展開されねばならず、かかる認識と無縁な諸君は、街頭闘争の延長線上に「蜂起」を夢想することの内に、大衆武装の可能性

を見出し得ぬまま、「逆起ち」革命論へと転落せざるを得ないのである。

蜂起の与件を語り得ずして蜂起を語ることは、われわれが樹立しようとする権力の問題を一切語り得ぬことを意味し、労働者の革命性そのものをあいまいにしていくであろう。

先進国⇨帝国主義本国の革命戦略は、与件として工場占拠・ゼネスト⇨二重権力状況を、その結着としての蜂起⇨世界革命戦争勝利として定立されるべきものである。

二重権力状況とは、国家権力が武装労働者階級に対して自己を権力として、全面支配強制を貫徹できず、また、労働者階級も、蜂起によつて未だそれを革命的に止揚し得ぬ状態として想定され得る。

そして、ここに至つて、資本主義国家権力の暴力装置は、その歴史的特質を、ダモクレスの剣として暴露する。資本主義国家権力の根源的優越性は、その中央集権制にある。だが、全社会的反乱状況⇨占拠ゼネスト・二重権力に直面したとき、強さは最大の弱さへと変質する。全社会的に拡大された戦線と、生々とした大衆の直接武装に直面したとき、一挙的鎮圧は即自には不可能となる。

ここにこそ、われわれは、史上最強の組織された暴力を、われわれの革命的暴力によつて打倒し得る根拠が存在することを発見出す。

このとき、労働者の即自的、防衛的武装は、革命党の指導に媒介されて、向目的の、攻撃的武装へと、蜂起の武装へと、決定的に高められなければならない。

高度に発達した資本主義国家の打倒は、概略としてこのように提出され得る。

われわれは、かかる高地から「占拠闘争」の意義を確認し得るのであり、蜂起の勝利をもたらす重大な要素として、占拠ゼネストを語るのである。

(蜂起論については、「世界革命」⇨前衛編集委の原則綱領草案第三章第二節を参照せよ)

## 二、蜂火の拡大⇨「志村」から「大崎」へ

序論での把握をふまえつつ、ここで、わが同盟が領導してきた多くの戦場・工場「突入」闘争⇨六・二二朝日無線スト⇨職場突入闘争、一一・一三志村化工突入、二・七全通大崎局突入、さらに城右高校不当解雇粉砕、東京菱和行動委の闘い等々の中から、突入行動として典型的な三つの闘いを簡単にふりかえり、その現在の総括作業を行つてみる。

秋葉原電気店街を根底からゆさぶり、機動隊をも放逐し、中小企業「販売業」における労働者反乱に一節の赤い糸を縫い通した六・二二闘争。

帝国主義者が先行的に仕かけた十一月「決戦」の中で、無力な総評ストをのりこえんと、敢然と工場に突入し、一月闘争の蜂火となり、ブルジョアジー、組合官僚に底知れぬ恐怖を与えた、一一・一三「志村化工」突入闘争。

十一月佐藤訪米⇨日米共同声明をもつて、先行的に「決戦」を仕かけ、左翼反乱部分押えこみに成功した日帝ブルジョアジーが、カサにかかつて「追撃戦」として展開してきた公労協反戦派バースト攻撃に対して、真向うからこれに反撃し、七〇年代階級闘争の蜂火となつた二・七全通大崎局突入⇨労働・職制実力粉砕闘争。

まさにこれらの闘いは、革命期における労学反乱を、当該・産別等々の種々な「粹」を破砕しつつ推進する具体的戦術を、わが日本階級闘争の中に再生させ、また、それゆえに、ブルジョアジーの血迷つた弾圧をあびた。

われわれは、これらの闘いから多くの教訓を得ることができ得るであろう。そして、労働者階級の革命的権力闘争の種々な「障害物」を打倒し、二重権力状況⇨蜂起を実現せしめる闘いとして「突入から占拠へ」を、如何に推進していくのかを、組織的・戦術的内容に至るまで修得していくであろう。

a、六・二二朝日無線スト⇨職場突入闘争  
この闘いを見るとき、まず確認しておくべきことがある。

それは、「志村」「大崎」闘争と違い、一応、「組合」による「合法スト」の装いをもつて展開されたという事実である。そういう意味では、「過渡的」な、「特殊」な、だがしかし、組合結成と行動委運動を一個二重のものとして担っている中小企業における闘争の困難性からすれば、普遍性を有したこの事実は、緻密に総括される必要があるだろう。

だが、いかにわれわれが「合法スト」として提示しようとも、ブルジョアジーは、その内実を見落すことは決してない。彼らは、自らの存在を危くするものに対しては、如何なる手段を行使しても「抹殺」しようとする。この闘争に対しても、その反乱の革命的質に恐怖した彼ら支配階級は、「威力業務妨害」等々のデッチ上げをもつて弾圧し、活動家逮捕、パージによつて強行的に乗り切り策動を展開した。

では、突入闘争は何をもたらしただのであろうか。事実経過を簡単に確認しつつ、それを見ていこう。

(詳しくは神田合同労組発行六・二二闘争パンフ「われわれは闘い続ける」を参照せよ)

(1) 六・二二正午、神田合同労組 (KGR) に結集する部隊五〇名、朝日無線店頭を突入制圧

(2) これを排除しようとする会社役員、職制、秩序派(第

突き上げにより、七・八スト方針を大衆的に決定せざるを得なくなるという局面に追いこまれ、さらには、これから離反する中間派部分を生み出していった。突入闘争は、かかる流動化—大衆の左右への分化を促進し、大衆の大部分に戦闘的労働運動の影像をくつきりと焼きつけていったのだ。そして、ここに、行動委員会運動を大胆に展開させることの現実性を鋭く突き出していった。

b、一一・一三志村化工突入闘争

六九年一一・一三正午、北部の地に、五〇名近くの労学ヘルメット部隊が出現し、志村化工正門から工場内に突入した。戦闘的ジグザグデモを二度に渡り敢行し、シュプレヒコール・食堂への直接のピラ入れ等を、守衛、職制の妨害をはねのけかちとつた。

突入部隊の、当日の行動獲得目標は次の三点であつた。

(1) 反戦派労働者に対する不当解雇撤回の闘争を意識的に  
圧殺、流産させた組合官僚(社民・日共)に対するどう  
喝をくわえ、

(2) 内部で行動委運動を大胆に展開しようとする戦闘的労働者への支援

(3) 「安保粉砕・工場反乱」のアップルを直接労働者の手に—これらである。

二組合)と反乱部隊との攻防戦の展開

(3) 営業は不可能となり、群衆も結集し、ここに機動隊介入

(4) これによる一層の群衆結集と駅前広場制圧戦への発展、第二回目の突入、群衆戦を背景にしつつ、追逮捕攻撃を粉砕し、同志を奪還し、機動隊を広場から追放しぬく

ほぼこれが当日の様相である。われわれは、このことから二つの革命的事実を見ることができよう。一つは、商店街ストライキが「突入」行動として闘われたとき、資本家の側は、その「防衛策」のキメテを持ち得ない、ということである。なぜなら、むき出しの暴力支配は、販売活動そのものを不可能にしてしまうからである。そして、もう一つの事実は、国家権力の暴力装置の群衆戦における無力性を余すところなく暴露した、ということである。六〇名の機動隊を五〇名の素手の部隊が放逐していったのである。この時点では、一〇・一一月と異なり、群衆全体に対するどう喝攻撃は未だ「不充分」であつた。とは言え、交通密集点における群衆戦に対する機動隊の「弱さ」は、いかに暴露したのである。

さて、突入闘争は朝日無線社員内部に如何なる状況を現出せしめたか。それは、「大流動」そのものであつた。第二デッチ上げ御用組合は大きな衝激を受け、下部からの

この三点は立派に達成した。だが、われわれは、一〇名の捕りよの内二名を実力で奪還したものの、八名の同志を日共・秩序派の手によつて、官憲に売り渡される(三名起訴)という事態に陥つてしまった。このことは痛苦に総括されねばならぬ。まず、二つの事柄が挙げられよう。第一は、職制—守衛の正門「逆バリ」を、あり得ないだろうと判断し、その対応策を組まなかつたこと。第二に、権力—機動隊との対応策のみに終始し、日共・秩序派暴力に対する評価が甘かつたこと。

実際、自己の存在基盤を危くされることを本能的に知つた小ブルの盲動ほど血迷つたものはない。如何なる盲動に出てもよいとも、これを完膚なきまでに粉砕し尽くす万全の用意が問われていた。この場合、単に武器をエスカレーターさせるということには直結しない。われわれは、強固な密集した隊列の攻撃的デモで充分粉砕し得たと判断し得る。要は、その組織的な準備と確認の問題として問われるであろう。

さて、この突入闘争は、何をもたらしただのか。それは、組合員内部の三分解傾向である。

(1) 行動委の質と量の強化

(2) 組合官僚に対してはつきりと不信を投げつけつつ、ダラ幹の圧殺策動に「手を貸した」結果を招いた自分にも

憤りを覚えた部分

(3) 日共民青の反トロキヤンペーンの周囲に小ブル的に  
囲いこまれた少数部分

資本・職制・日共・社民の三者一体の「神聖同盟」による悪質なデマゴギーの流布と、権力と一体となつた弾圧策動は、だがしかし、大規模な合理化攻撃と、不当解雇にみられた資本の暴力性を敏感に感じとつた労働者総体の中に、大きな反感を呼び起したのである。

かかる反応の内に、反権力、反秩序意識の発生と、それによる左派への結集、工場反乱の巨大な現実性を見てとることができらるであらう。

(青共同。「武装」三号を参照せよ)

### 二・七全通大崎局突入闘争

職場突入→労働、職制実力粉砕闘争として闘われた七〇年二・七闘争は、一〇・一二月「決戦」後の追撃攻撃としてかけられた公労協反戦派パージ攻撃に、真向うから反撃するものであつた。政府支配者階級の、トラック部隊Ⅱ労働(闘争鎮圧のみを目的として組織された郵政省の特殊暴力装置、白腕章をしていることから「白腕」ともいう)を配置しての全通戦線における処分攻撃に対し、諸派の無力な対応と、全通地本の裏切りを乗りこえた地平で、職制・労働・組合官僚実力粉砕闘争として政府ブルジョアジーを

根底から震撼せしめたのである。

全通大崎における労働者行動委員会の闘いは、とりわけ昨秋期来、「安保粉砕・訪米粉砕」をかかげた職制・労働追放、民同解体闘争として激烈に闘われ、独自集会、庁内デモにより、職場を流動制圧してきた。

これらの闘いに恐れをなした郵政当局は、行動委に対する処分工作を策してきた。これを把握した行動委の断固たる先制の大衆実力闘争によつて、当局は、処分発令を延ばさざるを得なくなつてしまつた。以降、連日の公然たるステッカーはり闘争により、「持久戦」の失敗を悟つた当局は「懲戒免職二名」を筆頭に、前例のない大処分攻撃をかけてきたのだ。すでに、六日の処分発令当日、労働Ⅱトラック部隊の大量投入と、大崎署には装甲車三台を含む機動隊の待機という「万全の準備」をもつて、政府ブルジョアジーは、反戦パージの天王山Ⅱ大崎行動委解体にかけたのである。そして、これに真向うから反撃を宣言したものが、二・七大崎局突入→労働、職制実力粉砕闘争であつた。

(1) 南部地区労学行動委を先頭とする三十数名の部隊は、七日早朝、大崎局左右虚用門二帯を制圧し、ピラ入れ流動ピケをおこなふ

(2) これを弾圧せんとする労働、職制、私服刑事の弾圧

を、強固なスクラムによる突入闘争で完膚なきまでに粉砕

(3) さらに数度に渡る突入→職制・労働の実力粉砕をかちとり

(4) 官憲にラチされた同志数名を奪還し抜いたのである。支配階級の側の予測を上まつた南部行動委の早朝の電撃戦は、旧来の「実力就労闘争」の地平をはるかに乗りこえた。それは、単なる「職場復帰」と異なり、処分を生み出した資本家階級の職場支配秩序そのものに対する真向うからの挑戦に他ならない。

資本家の職場支配秩序の具現者たる労働、職制が、われわれの革命的制裁に、恐怖を満面に逃げまどい、ぶざまに打倒されていく姿こそ、労働者階級の闘いの方向をはつきりと指し示すものであつた。

実にこれ以降、行動委の質と量の両面の強化と、物ダメ闘争の展開として闘いは進んでいるのである。

もはや、民間は大崎においては、一定のポーズすらとり得ず、大衆的に解体されているのである。

われわれは、二・七闘争において、公然と職場にゲバルトを持ちこんだ。労学反乱部隊の実力による資本家の職場支配秩序の解体。これこそ、労働者の秩序の始まりの荒々しい足跡である。いまやわれわれは、全ての工場、職場に内部階級闘争を推進し、大衆反乱を推進するための公然た

る叛旗を翻えず時がきた。その烽火として、突入→組合官僚・職制実力粉砕闘争に勝利するであらう。

だが、ここでわれわれは、一点、冷酷な総括問題を見なければならぬ。それは、出動した機動隊の巧妙な攻撃による、七名の同志の逮捕を許してしまつたことである。このことは、直接には、「引き際のまずさ」から来る。だが、より根本的には、それは、われわれ自身の部隊行動と、それを規定する組織性、意識性、編成の問題として把えかえさなければならぬであらう。

二・七大崎闘争は、運動→組織論の分野における重要な問題を、日本階級闘争につきつけた。まず第一に、地区労学共闘による職場反乱→地区制圧戦の問題であり、第二に、職制・組合官僚・労働の実力粉砕の意義であり、第三に、遊撃戦の推進の問題であり、第四に、当然にも、旧来の反戦青年委運動の根本的転換をつきつけた、ということである。

われわれは、これらを一層深化させ、階級闘争の飛躍的發展をかちとつていくであらう。

### 三、 結語にかえて

すでに明らかなるように、二・七大崎闘争に至つて、工場・職場突入闘争は、その意義を余すところなく指し示した。内部における行動委員会運動の断固たる推進と、外部反乱

部隊の突入による反乱の深化・拡大。「突入」行動は、内部階級闘争の非和解的進撃をかちとる。職制・労担実力粉砕・追放！かかる闘いから、われわれは大胆に労働戦線における占拠ゼネストの推進を展望し得るのである。

簡単に、この三つの闘いをふり返つてみるならば、(1) 合法↓非合法 (2) 実力カンパニア↓実力粉砕闘争の流れる見ることが出来るだろうし、その部隊結集に關わつて(3) 公然たる大衆結集↓(一般的に)秘密結集↓党派部隊という流れも押えられよう。そして、後に至る程、「襲撃戦」の様相を帯びていることも。

だが、いずれの闘争も、資本・組合官僚・職制の「どう喝」を、その普遍性として有するものである以上、実力闘争以外の何物でもない。その点から、突入部隊の「武装」の問題が問われてくる。だが、この問題は、現在までの過程で明らかのように、単純に、権力と内部支配秩序維持者との二正面作戦においてのみは定立されないだろう。もう一つの重大要素である内部反乱の推進状況が不可分なものとして考慮されるからだ。これらの複合の上に立つて、戦術―武装の問題は解決されていくだろう。「志村」と「大崎」を比べると明らかのように、後者においては、その電撃的な鉄拳制裁によつて「妨害物」を粉砕し得た。

だが、「大崎」においても見られたように、当初のピラマキ合法闘争から、実力粉砕↓非合法闘争へと同一部隊

が、おそらくは、同一に近い意識のまま進行していったことは、冷静な総括を問われるであろう。

かかる問題は、一つには「部隊編成」の問題として把え得るだろう。「合法部隊」( ) との分離編成としても考えられるかも知れぬ。あるいは、明確な単一指導系統を有した一個二重の部隊として。

かかる技術配慮は重要な問題である。そして、それは、根本的に革命組織そのものの「内実」を組織性として突きつめていくであろう。

いずれの闘争においても、一定程度の国家権力の弾圧を許してしまつたということは、これらの闘争が、久しく日本階級闘争が経験し得なかつた闘争であつたということと同時に、それとの「相関関係」をわれわれ自身も充分には脱し切れていなかつた、ということを示しただろう。

すなわち、わが同盟自身が、自己の獲得した戦略内容を、具体的戦術的内容の次元までに、世界革命戦争勝利の目的意識性から逆規定された形での個別への「凝縮」をなすことにおいて、若干の「甘さ」を残していた、ということではないであろうか。

このことは、階級闘争の現在の質―階級闘争の発展過程に対して時間的に「対応する」形態においてしか戦術―組織行動を提起し得ないという、権力闘争期以前のな思考様

式を、われわれ自身もその内部に残し、として有していたことを示すものであろう。

われわれは、全力を挙げて「平和と民主主義時代」の「遺産」を、自らの体内からセンメツしなければならぬ。

権力闘争に勝利する組織へと、われわれ自身、より一層の強化・純化をかちとつていくであろう。

それを通して、遊撃戦と大衆反乱の結合をかちとれ！

# 世界革命

創刊号 A五判 二〇〇頁

定価 三五〇円

## 前衛党建設特集号

- (一) 反政府闘争から権力闘争へ  
―何を総括し何を展望するか―
- (二) つきつけられているものは何か  
―世界階級闘争の現局面―
- (三) 共産党原則綱領草案  
○資本主義と労働者階級  
○労働者階級の世界史的任務  
○労働者階級と共産主義者

発行 前衛編集委員会

# 前衛

週刊

☆激化する世界危機をプロレタリア日本革命へ！

☆日本革命をアジア革命の勝利と

世界革命の突破口とせよ！！

発行 「前衛」編集委員会

購読料 1部20円・20回400円

## 東大裁判闘争とわれわれの任務

統一公判要求をめぐって出廷拒否・保釈拒否闘争にまで発展した東大裁判闘争は、裁判権力の分離欠席裁判の強行、大量実刑判決攻撃のまえに、これまでの裁判闘争戦術の再検討を迫られている。

そしてこれをめぐって被告団および弁護団は、従来の出廷拒否戦術に固執する部分、ただちに一審より出廷し通常の公判闘争戦術に転換をはかることを主張する部分、および両者のあいだを動揺する部分に、大きく分解した。

この分解は、しかしまだ、ほんの序幕にすぎない。

それはまだ、裁判の形態をめぐる分解でしかなく、そのあとにはなお、東大裁判闘争をどのような内容、どのような論理によつて闘つていくかという本質的問題がひかえているからである。

いまやわれわれは、出廷拒否戦術の転換が大量実刑判決への屈服であるか否かという低次元の口げんかを早急に止揚して、日本階級闘争および学園闘争の現局面との関連において東大裁判闘争をどのような内容のものとして、またどのような戦術で闘つていくのかという本質問題に答えなければならぬ。

だが、これに答えるためには、まずわれわれは裁判闘争戦術の一般原則をふりかえつて確認しておくことが必要であろう。

事態は、プチブル急進主義の観念病の大流行のおかげで、それほど混乱しているからである。

## 一、裁判闘争の原則

まず最初から明らかなのは議会闘争と同様、裁判闘争は法治国という国家形態を根本前提にするところのブルジョア国家機関の内部における闘争であるということである。

したがって、第一に、非常事態宣言のもとに法の執行が停止され戒厳体制と軍事判決裁判が支配しているような情況のもとでは、あるいはまた大衆運動に対する抑圧が法を媒介しないで秘密政治警察や党軍団の直接の暴力支配として実現されているかつてのナチ独裁のような情況のもとでは、一般には裁判闘争が存在しえないことは自明である。

また第二に、通常の法治体制のもとでも、裁判闘争が、ブルジョア国家機関の内部における闘争として、議会闘争と同じく、階級闘争を側面から促進するという第二義的地位しかもちえないことは、同様に自明でなければならぬ。

ここから、次の結論がでてくる。  
すなわち、通常の法治体制のもとで、裁判闘争を現実の

全社会的反乱を組織しブルジョア国家権力に対する武装蜂起を日程にのせるべき直接的な革命情勢のもとでのみ、はじめで正当となる戦術なのである。

だから、それ以外の情勢では、第二の戦術―法廷を積極的に利用するという戦術―が、通常の裁判闘争戦術となるのであるが、この場合われわれは、ブルジョア法治体制の二面性、その矛盾を充分にわきまえていなければならぬ。たしかにブルジョア国家は、法治国という国家形態をその歴史的特質とする。そしてこの法治国という国家形態は、立法・行政・司法の三権の分立をたてまゑとする。

ブルジョアの階級関係の歴史的特質は、商品売買秩序を社会の全成員に対し普遍的かつ平等に維持するという形式をとおして階級搾取と階級支配を実現しようところにあるからであり、そしてまさにこの形式こそが、社会の全成員を抽象的な私的個人としてとりあつかう法形式にほかならぬからである。

だが、同時に他面では、ブルジョア国家は、こうした法形式をとおして、階級闘争を全面的に処理しようものではない。

階級闘争は、市民社会内部におけるたんなる私的個人相互間の闘争に尽きるものではないからである。

だから、ブルジョア国家権力―その真の担い手は軍隊・警察・官僚からなる行政執行権力にあるのだが―は、重大

階級闘争の補足的促進手段として利用するという場合、その利用戦術は、基本的には二つしかないということである。その第一は、ブルジョア裁判そのものをボイコットし、それによつて支配階級・国家権力の総体に対する敵対と宣言を宣言しつづけるという戦術であり、第二は、法廷をかれらの暴力の暴露、それに対する闘争の宣伝・煽動の場として利用するという戦術である。

このうち第一のボイコット戦術は議会ボイコット戦術と同様、たんにそれだけでは、なんらの現実的戦術にもなりえない。

というのは、それは、支配階級・国家権力に対する敵対の宣言とはなりえても、それだけではかれらの議会的結集政策や欠席裁判の強行に対して現実的打撃をあたえることはできず、したがって実際にはその消極的傍観の戦術―敗北主義の戦術―となるほかはないからである。

だから、ボイコット戦術は、それ自体で成立しようものではなく、ブルジョア国家機関―投票所や監獄等々―に対する革命的襲撃の戦術の一部としてのみ成立しうるにすぎないのである。

つまりボイコット戦術は、一般には、労働者人民大衆の

を階級闘争に直面するや否や、この法治国という形式をみずからのりこえざるをえなくなる。

そしてそうなるや否や、司法権力の独立性はまつたくのみせかけとなり、行政執行権力のこの暴力を合法的なものとしてとりつくりうためのたんなる道具となる。

それゆゑ、法廷闘争戦術の根本はブルジョア法治体制のなかにふくまれているこの矛盾を攻撃的に衝き、それによつて国家権力の暴力の反人民性を具体的に暴露することになければならない。

そしてこの攻撃こそは、じつは同時にまた、重罪判決等

等に対する最大の防衛でもある。  
まず第一に、一般的にいえば、人民大衆の闘争を個別具體的な部分要求のための闘争からブルジョア国家権力そのものに対する闘争へと転化させる最大の契機となるものは、この個別闘争に対する国家権力の介入であり、弾圧である。裁判闘争の基本的獲得目標は、この転化を、かれらの法廷自身を利用して側面から促進し加速することにある。

だが、同時に他方では、人民大衆は、資本主義的階級関係の商品経済的形態とそれに基づくブルジョア国家の法治国形態の故に、国家権力のこの弾圧がブルジョア国家の本質に根ざすものではなく、その個々の機関、個々の政府の翻意に基づくものではないかという強い幻想をもっている。だから、この転化を促進するためには人民大衆自身のこの

国家幻想を打碎かなければならない。

だが、そのためには、ブルジョア国家の法治的立前とその現実の暴力性との間の矛盾を鋭く衝き、その総体の反人民性を暴露しなければならぬ。そしてそのための最良の戦場の一つこそ、かれら自身の公判廷—ブルジョアの法秩序の神殿—を利用する裁判闘争なのである。

公判闘争の第二の目標は、いうまでもなく、被逮捕者に対する有罪判決の蔭謀を打碎き、階級闘争の戦士を革命の戦場に取戻すことにある。

だがこれは、ブルジョア法廷を国家権力に対する闘争の宣伝・煽動の場として利用するという戦術と決して矛盾するものではなく、正にそれを通じて闘いとるべきものである。

なぜなら、そのための最良の方法は、ブルジョア法治体制の立前と現実との矛盾を鋭く衝き、立前を救うためには重罪判決等を緩和せざるをえないように、この法秩序の神官共を追いこむことにあるからである。

## 二、東大裁判闘争の戦術

東大裁判闘争は、統一公判要求の闘争からはじまったのであつて、いうまでもなくこのことは、それが裁判闘争戦

術として、ボイコット戦術をとらなかつたことを意味する。

というのは、裁判ボイコット戦術をとるといふのであれば、統一公判を要求すること自体が無意味であり、また弁護士等々を専任することさえ無意味だからである。

つまり、東大裁判闘争は当初から一致して、ボイコット戦術ではなく、法廷を学園闘争と国家権力に対する闘争の宣伝煽動の場として利用するという戦術をとつていたのであり、またその戦術手段として、統一公判要求闘争戦術をとつたのであつて、これをわれわれは、日本階級闘争の現局面の性質からみて正しい方針であつたと考える。

だが、この統一公判要求の闘争に対し、裁判当局は、分離公判の強行をもつて答えてきた。

こうして、東大裁判闘争は、この分離裁判をボイコットするか、それともそれをそのままうけいれるのか選択を問われることになつたのであつて、これは戦術的にきわめてむづかしい選択であつた。

というのは、裁判当局が分離公判の強行を決意している以上、分離公判ボイコットは、裁判そのもののボイコットを、したがつて欠席裁判の事実上の承認を意味せざるをえなかつたからであり、また、分離公判を直ちにうけいれることは、戦わずして裁判当局に屈服することを意味せざるをえなかつたからである。

したがつて、ここで要求された戦術は、分離公判の強行

に対する抗議の意志表示、および公判条件を幾分なりとも改善するための圧力行為としての、分離公判ボイコット戦術であつた。

そして安保共闘に結集して東大闘争を闘つたわれわれが、分離公判ボイコット戦術に連帯したのは、まさにこうした観点からであつた。

しかるに東大裁判闘争は、ここで混乱した。

小ブルジョア急進主義の観念性と自然発生性の論理であるいわゆる「自己否定」の論理が弁護人および被告団の一部にも流行しはじめ、そうした論理が公判闘争戦術としての分離公判ボイコット戦術と二重写しとなり、そこから分離公判ボイコット自己目的化しはじめたのである。

こうして東大裁判闘争は、当初の基本戦術であつた法廷を革命的な宣伝煽動の場として利用するという戦術から逸脱して、裁判そのもののボイコット戦術へと傾斜しはじめたのであつて、これを端的に示したものがこそ、保釈拒否闘争であつた。

だが、われわれは、こうした混乱したいきさつからであつたとはいえ、徹底した分離公判ボイコット戦術がつづけられたという事は、六九年夏の段階において、すなわち東大、日大バリエードが破壊され、学園占拠闘争が国家権力・機動隊のまえに後退を余儀なくされ、しかも一〇、一月に安保闘争の山場をむかえようとしていた段階におい

て、大きな意義をもつていたと考える。

というのは、それは、学園闘争とブルジョア国家権力との非和解的な敵対性を鋭く宣言しつづけることに役立ってきたからであり、またそれをおして、日本の支配階級・国家権力の安保攻撃に対する労働者学生の大衆布告の旗じるしとして役立ってきたからである。

だが、われわれは、六九年秋をもつてこうした分離公判ボイコット戦術の役割は、基本的には終つたと考える。

というのは、まず第一に、六九年秋には支配階級・国家権力に対するこうした敵対の宣言ではなく、現実の敵対行為が、すなわち、巨大な都市反乱の爆発とそれを起点にする学園バリエードの再構築、工場・職場反乱へのその波及が問われたからである。

また第二に、分離公判ボイコットが学園反乱の側からする支配階級・国家権力への敵対の宣言であつたとすれば、六九年末の岡田実刑判決は支配階級・国家権力の側からする学園反乱への非和解的な敵対の宣言であり、これをもつて両者の非和解的敵対は、一応最終的に確認されたからである。

それゆえ、いまや東大裁判闘争はただちに、ためらうことなく、当初の基本戦術、すなわち、公判廷を革命的な宣伝煽動・暴露の場として利用するという戦術にかえらなければならぬ。

拘置所、監獄等々の革命的襲撃を組織する勇氣も決断も持ちあわせないで、それを裁判権力への屈服と呼びうるものは、かれらの欠席裁判を受動的に承認することをもつて革命的戦術であると勘違いしている敗北主義者のたわごとだけであろう。

たしかに、分離公判は、敵の設定した土俵であるが、もともと裁判闘争全体がそうなのであつて、革命家は、このような敵の土俵の中でも闘うことを、知つていなければならぬ。

### 三、獲得目標は何か

では、東大裁判闘争は、具体的に何を獲得目標にし、またどのような公判闘争戦術をもつて闘わなければならぬのか。

これに答えるためには、しかしわれわれは、日本階級闘争および学園闘争の現局面の性質を知らなければならぬ。それはただ、階級闘争全体が解決を迫られている課題との関連においてのみ回答しうる問題だからである。

では、今日、日本階級闘争が死活問題として当面している問題は、なにか。

七〇年安保をめぐる日本階級闘争の画時代的な歴史的意

である。

フランス階級闘争は、一〇〇〇万労働者学生の工場占拠・学園占拠の反乱ゼネストにまで登りつめ、それを二重権力・武装蜂起の革命闘争にまで発展転化することができないで敗北した。

これに反し、日本階級闘争は、工場占拠の反乱ゼネストへの先駆的闘争を大衆的学園占拠闘争・都市密集地区占拠闘争として、ようやく産みだした萌芽段階で、それを押しつぶされたにすぎない。

したがつて、日本階級闘争のこの後退局面は、明らかにまだ過渡的な、中間的な後退局面にしかすぎず、労働者戦線や、学生戦線でも高校戦線は、まだようやく東大・日大闘争の六八年の前段階にむけて動きはじめているにすぎない。

日本階級闘争において東大裁判闘争が果たすべき役割、その獲得目標はまさにこの点に関連する。

くりかえし強調すれば、たしかに裁判闘争は、階級闘争の主戦場ではなく、したがつてそこから学園占拠闘争や全共闘運動の再構築の突破口をきりひらきうるものではない。

そうした突破口は、現実の戦場において、すなわち、学園や街頭や戦場において支配階級・国家権力との対決をとおして闘いとられるべきものであつて、裁判闘争は、これを側面から促進しうるにすぎない。

義は、六七年秋の羽田闘争、六八年初頭の佐世保・王子・成田闘争を突破口にして、まず学園において大衆的占拠闘争とそれに個有の大衆的闘争組織・全共闘を産み出し、そこからさらに六八年秋には新宿において都市密集点の大衆的地区占拠闘争を産みだしたという点にある。

そして、まさにこの大衆的学園占拠闘争や大衆的地区占拠闘争こそはもはや羽田・佐世保・王子・成田闘争のような反戦・反安保・反帝国主義の実力街頭闘争・実力反政府闘争ではなく、それを超える革命的反乱闘争・革命的権力闘争の萌芽なのであつた。

だが、同時に、七〇年安保闘争の限界は、このように革命闘争の萌芽を産みだしながら、それを六八年五月のフランスのように、工場占拠・学園占拠の反乱ゼネストへと発展させないで、支配階級・国家権力の総反撃によつて萌芽の段階で押しつぶされたという点にある。

こうして日本階級闘争は、六九年一月の蒲田・羽田闘争の敗北以後明らかに後退局面に入つていたのであつて、この後退局面にいかにして歯止めをかけ、いかにしてそれをふたたび攻勢局面に転ずるかが、当面の死活問題なのである。

だが、このばあいわれわれの念頭におかなければならぬ点は、日本階級闘争のこの後退局面は、六八年五月以後のフランス階級闘争の後退局面とは本質的に異なるという点

また、ブルジョア国家権力の眞の担い手は、軍隊・警察・官僚からなる行政執行権力にあるのであつて、裁判所は、かれらの法秩序の神殿にしかすぎず、また裁判官は、かれらのお雇い神官にしかすぎない。

だが、われわれは、裁判所と裁判闘争のこうした根本的限界を十分にわきまえたうえで、このブルジョア法秩序の神殿を、日本階級闘争の当面の死活問題である学園占拠闘争と全共闘運動の再構築、その戦場・工場への波及のための宣伝煽動の場として利用しなければならぬ。

では、そのために何が要請されているのか。  
まず第一にわれわれは、今日のブルジョア学園秩序の根本的な腐敗性と反人民性、およびそれを不可欠の一環とする現存秩序総体の根本的な腐敗性と反人民性を鋭く暴露し、大衆的学園占拠・反乱闘争としての東大闘争の根元的な正当性、社会的な正義性を全社会の前につきつけなければならぬ。

そのために、第二にわれわれは、大河内、加藤をはじめとする教授団どもを証人台のまえにひきづりだし、かれらを人民裁判にかけなければならぬ。

第三にわれわれは、日共・民青の指導者を証人台のまえにひきづりだし、かれらの反人民的な武装、教授団・権力との結託を暴露しなければならぬ。

第四にわれわれは、警察・機動隊の幹部や隊長を証人台

のまえにひきづりだし、かれらの暴力がかれらのたてまえである法をみずからのりこえていることを暴露し、これを通じて国家暴力の反人民性を労働者人民大衆のまえに鋭く突きださなければならぬ。

そして、東大裁判闘争がどこまで法廷を学園闘争と全共闘運動の再構築のための宣伝煽動の場として利用しうるかは、じつは、この三種類の秩序のスターたち―教授団、日共・民青、機動隊―を証人台にひきだせるか否かにかかっているのであつて被告・傍聴人一体となつたところの拘束・監置覚悟の法廷実力闘争―出廷拒否、一斉退廷、法廷占拠等々の戦術を駆使した法廷実力闘争が展開されるとすれば、それはまさにこのためにこそ展開されなければならないのである。

最後に、被告団運動の大衆的展開、傍聴人の公判への大衆的・持統的動員、公判闘争と大衆闘争との結合等々の裁判闘争の大衆的組織化について一言すれば、それを実現する最大の保証は、公判闘争自体を社会的焦点と押しあげるようなかたちで公判闘争戦術を設定するということであり、そしてそのための戦略的環もまた、さきの三種類の秩序のスターたちを証人台のまえにひきづりだし、かれらをおくろだたきにするということなのである。

以上みたところを結論的に要約すれば、

東大裁判闘争の主要目標は、それを全共闘運動再構築の契機にするという点にあるのであり、

またそのための戦略的環は、そしてさらにつけ加えるならば、有罪実刑判決の陰謀を麻ひさせるための戦略的環は、教授団、日共、機動隊責任者を公判にひきずりだすという点にあるのであり、そしてこれまでの裁判ポイント・欠席裁判の消極的傍観の戦術は、二審では一般に証人調べは行なわれないのであるから、実際にはこの戦略的高地を自ら放棄することを意味する、  
ということである。

---

武 装 4号

发 行 青年共産同盟

連 絡 前衛社  
電 264-5079

定 価 150円

---